

仙台市文化財調査報告書第105萬

北前遺跡

— 第2次発掘調査報告書 —
＜山田市民センター関連＞

1987年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第105集

北前遺跡

— 第2次発掘調査報告書 —
＜山田市民センター関連＞

1987年3月

仙台市教育委員会

序

仙台市の南縁を画して東流する名取川の北岸流域一帯には、市内でも数多くの埋蔵文化財包蔵地が分布していることで知られています。特に、縄文時代の遺跡の宝庫とも言われ、四大縄文遺跡（三神峯・山田上ノ台・上野・人来田）もこの地域に集中しています。

北前遺跡は、この名取川北岸にあり、5～6万年まで遡る前期旧石器時代の石器を包蔵する重要な遺跡として注目をあつめた山田上ノ台遺跡の北縁に接して位置し、山田上ノ台遺跡と同様に前期旧石器時代の石器を出土する遺跡であります。近年、この流域一帯は市街化の影響を受け、大規模団地や宅造の急増によって大きく変貌しつつあります。これに伴って、公共事業も進められ、埋蔵文化財包蔵地に係る開発行為も増加の傾向にあります。

本書は、北前遺跡の西隣に市民センターが建設されることになり、北前遺跡隣接地扱いとして記録保存のための調査を実施したものの成果を公表するものであります。調査は、多くの地元の方々や学識者の協力を得ながら、4月から9月にかけて実施されました。その結果、前期旧石器時代の遺物の出土はありませんでしたが、笊川以西の地域から初めて須恵器の窯跡が発見され、青葉山丘陵から茂庭丘陵にいたる地域での古代窯業の研究のための貴重な資料を得ることができました。また、鹿除土手とも呼ばれる杉土手の調査が本格的に実施されたのは今回が初めてであり、調査地域内での杉土手の性格の違いや規模が明らかになったことは、今後、杉土手の構築年代やその歴史的意義を明確にしていくための貴重な資料を提供してくれるものであります。

本報告書は、これらの調査結果をまとめたものでありますが、調査や整理にあたっての多くの方々の御協力と御指導があつて作成されたものであります。心から敬意と感謝を申し上げる次第であります。

本報告が多くの方々の学術的研究、研究家はもとより、市民各位に活用され、文化財保護啓蒙思想の啓発に大きく役立つことを念じるものであります。

昭和62年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 繁

本文目次

序文

例言・調査要項

| | |
|------------------------|----|
| I. 調査に至る経過 | 1 |
| II. 遺跡の位置と環境 | 1 |
| III. 調査の方法と経過 | 5 |
| IV. 基本層位 | 7 |
| V. 潜池部分の調査 | 9 |
| 1. 潜池堆積土出土遺物 | 9 |
| 2. 潜池底面（第Ⅱ層上面）検出の遺構と遺物 | 10 |
| 3. 第Ⅱ層の調査と検出遺構 | 11 |
| VI. 杉土手部分の調査 | 12 |
| 1. 杉土手 | 12 |
| 2. 杉土手下の遺構と遺物 | 18 |
| VII. 調査結果の検討（まとめ） | 22 |
| 1. 旧石器時代 | 22 |
| 2. 縄文時代 | 22 |
| 3. 古代 | 22 |
| 4. 近世 | 23 |

挿図目次

| | | | |
|---------------------|----|-------------------|-------|
| 第1図 遺跡周辺の地形 | 2 | 第9図 杉土手 | 13・14 |
| 第2図 周辺の遺跡 | 4 | 第10図 杉土手東部調査区 | 17 |
| 第3図 調査区配置図 | 6 | 第11図 杉土手東部調査区出土土器 | 18 |
| 第4図 基本層位 | 8 | 第12図 須恵器窯跡 | 19 |
| 第5図 東棟部分調査区出土遺物 | 9 | 第13図 須恵器窯跡・灰原出土土器 | 20 |
| 第6図 東棟部分調査区東西断面図 | 10 | 第14図 ピットと出土土器 | 21 |
| 第7図 東棟部分調査区溜池底面の状況 | 11 | 第15図 明治期の地籍図 | 27 |
| 第8図 東棟部分調査区第II層検出遺構 | 11 | 第16図 杉土手全長 | 28 |
| | | 第17図 仙台周辺の「シシ垣」 | 29 |

写真図版目次

| | | | |
|--------------------|-------|-------------------|----|
| 図版1上 調査前全景 | 32 | 図版8上 杉土手東部南半作業風景 | 39 |
| 中 試掘トレンチ作業風景 | | 杉土手東部東西土層断面 | |
| 下 試掘トレンチ西壁土層断面 | | 中 須恵器窯跡全景 | |
| 図版2上 東棟部分調査区作業風景 | 33 | 下 須恵器窯跡燃焼部土層断面 | |
| 中 東棟部分調査区溜池底面状況 | | 図版9上 杉土手東端土層断面 | 40 |
| 下 第1・2土坑 | | 中 杉土手中央部土層断面 | |
| 図版3上 東棟部分調査区第II層精査 | 34 | 下 杉土手西部土層断面 | |
| 中 第3土坑 | | 図版10上 名取郡北方山田村絵図 | 41 |
| 下 東棟部分調査区段丘疊層面 | | 中 名取郡北方鈎取村絵図 | |
| 図版4～7 杉土手 | 35～38 | 下 名取郡北方根岸村平岡村入合絵図 | |
| | | 図版11 出土遺物 | 42 |

例　　言

1. 本書は、仙台市山田市民センターの建設に先行して実施した北前遺跡隣接地の発掘調査報告書である。（昭和56年度の調査を第1次調査とし、今回の調査を第2次調査とする。）
2. 出土遺物の整理と報告書作成は、佐藤美智雄、小川淳一が担当し、報告書の執筆、編集は小川が行った。
3. 調査および整理について、次の方々および機関から多くの指導・助言を賜った。
豊島正幸（東北大学理学部地理学教室）、藤沼邦彦・手塚 均・相原淳一（宮城県文化財保護課）、小井川和夫（東北歴史資料館）、丹羽 茂（宮城県多賀城跡調査研究所）、小井川百合子・佐々木和博・田中則和（仙台市博物館）、鎌田俊昭・梶原 洋（石器文化談話会）、渡辺泰伸（古窯跡研究会）、種部金蔵（仙台市民図書館）、高倉 淳（仙台市立国南萩陵高校）、逸見英夫（仙台郷土研究会）、毛利 伸・伊藤惣十郎・大竹誠一・加藤一夫・遠田 宏（東北大学植物園）、武智英生（八木山動物公園）、国立歴史民俗博物館、高橋 理（東北大学）
4. 本書における土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1973）を利用した。
5. 本書使用の地形図は、建設省国土地理院発行の1/50,000地形図「仙台」を複製したものである。
6. 調査、整理に関する諸記録および出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

調　　査　　要　　項

遺跡の名称：北前遺跡（C-131）隣接地及び杉土手（C-525）

遺跡所在地：仙台市山田字杉土手5番地

調査対象面積：8,000m²

調査面積：2,000m²

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課

担当職員：佐藤美智雄 小川淳一

調査期間：昭和61年4月22日～9月5日

調査参加者：阿達長治、阿部とめよ、阿部とよ子、阿部みはる、岩間文子、大里ちよし、小（五十音順）原ミツヨ、北川礼子、佐藤ハツ、下山文子、菅井マツ子、沼田和子、沼田すい子、沼田スエノ、植田 純、川岸直人、高橋孝弘、戸田泰史、長谷川浩一、リカルド・ロドリゲス平

調査協力：山田住宅親交会 会長 加藤義夫

I. 調査に至る経過

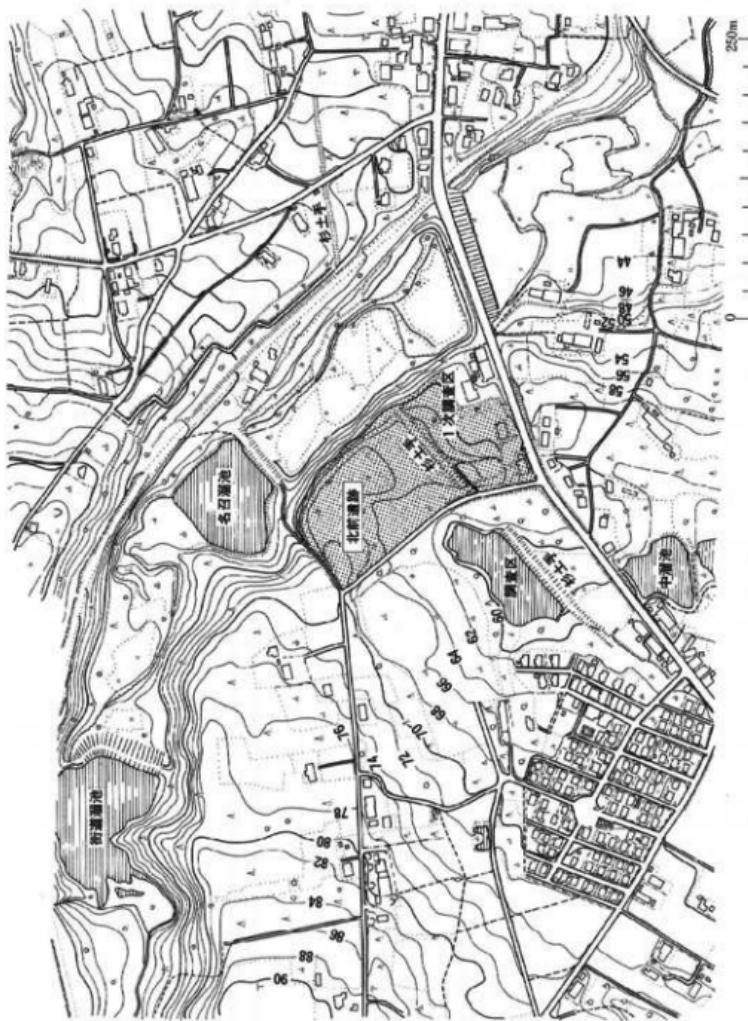
仙台市には、現在、14ヶ所に地区市民センターが存在しているが、市南西部には西多賀に1ヶ所存在するだけであった。このため、昭和60年度後半期、新設の市民センターを、仙台市山田字杉土手地内に建設する方針が決定した。建設予定地の一部は杉土手（C-525）にかかるが、他の主要建物部分は「仙台市文化財分布地図」に未登録の箇所であった。しかし、建設予定地が昭和56年度の調査で前期旧石器時代の石器を出土した北前遺跡の西隣にあたるため、文化財課は北前遺跡隣接地扱いとしての記録保存のための調査を必要と考え、地域振興課と協議を行った。その結果、昭和62年4月開館に先立つ発掘調査を実施することになった。

II. 遺跡の位置と環境

位置：調査対象地域は仙台市山田字杉土手地内に所在する。北前遺跡の西隣の箇所である。本地域は、北西約3kmに太白山を仰ぎ、南方約1kmに名取川に通る高館丘陵を望む場所で、JR東北本線長町駅の西約5kmに位置している。本地域を含む仙台市南西部は純農村地帯であったが、近年、太白団地、ひより台団地、日本平団地、羽黒台団地などの大規模団地や宅造の急増によって大きく変貌しつつある。

自然環境：奥羽山脈の東に派生する丘陵の中で、広瀬川と名取川とに挟まれた丘陵は、荒川以東を青葉山丘陵、以西を茂庭丘陵と呼称されている（地質調査所：1986）。仙台市南西部の茂庭丘陵は、主峰太白山（標高320.7m）から南東方向へ300mから100mと標高を減じてなだらかに傾斜しながら、東流する名取川に通っている。この丘陵は南東流する中小の河川によって開拓され、谷や沢が形成されている。丘陵の麓には、名取川によって形成された台の原・上町・中町の三段の河岸段丘が発達している。

調査対象地域は、前期旧石器時代の石器の発見された山田上ノ台遺跡と北前遺跡ののっている段丘面と同一の上町段丘面上に立地している。この段丘面は、段丘上に降下堆積した川崎スコリア層の存在や段丘疊層の花粉分析から約3万年前頃には既に段丘化していたと理解されている（豊島：1985、竹内：1985）。山田地区の上町段丘は北前遺跡から山田上ノ台遺跡に向って、標高70mから50mへと僅かに傾いている。また、両遺跡の東には谷が、西には沢が入り込んでおり、段丘は舌状台地状の地形となっている。この東側の谷には新・納・中・街道・名呑の連続する5つの溜池が現存し、西側の沢には中溜池の他2つの溜池が存在していた。この西側の沢地に造られた溜池の内、最も北にあった溜池が今回の調査箇所である。現在、溜池は埋められ、周辺も大きく改変されているが、古い地形図を見ると、調査地域は、北東、北西両方向からの沢の合流地点にあたり、沢を土手で堰止めて造った溜池であったことがわかる。



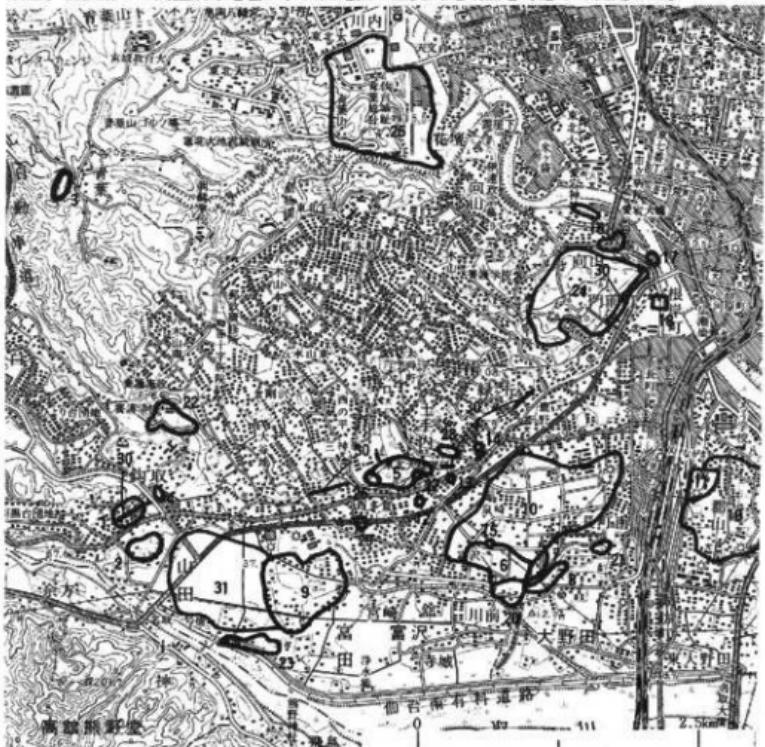
第1図 港跡周辺の地形（港湾整備前）

歴史的環境：山田地区には、現在、14ヶ所の遺跡が確認されており、内4ヶ所について調査が行われている。以下、山田地区を中心として名取川北岸地域の歴史について概観してみたい。

山田地区の周知の遺跡の大部分は、旧石器時代、縄文時代、平安時代のものであり、弥生時代から奈良時代のものは僅かである。このことは、各時代の遺跡が連続と統いて確認されている荒川以東の地域とは様相を異にしている。具体的に観ると、荒川以東の地域では縄文時代早期前葉の下ノ内浦遺跡に始まり、前期の三神峯遺跡、中・後期の六反田遺跡、下ノ内浦遺跡などの縄文時代の遺跡があり、続く弥生時代以降は富沢遺跡での弥生時代～近世(奈良は不明)に至る水田跡の発見に現れているように比較的順調に発展した地域である。このことは、裏町古墳や兜塚古墳などの高塚古墳、愛宕山、宗禅寺などの横穴古墳群、富沢窓跡などの西多賀窓跡群、多賀城以前の宮衙である郡山遺跡などの存在、8世紀初頭頃からの集落跡の増大、平安時代の条里型地割の確認、平安時代の居住域の拡大などによっても裏付けられている。これに対して、山田地区的遺跡の特徴は、山田上ノ台遺跡と北前遺跡の調査結果に凝縮されている。両遺跡とともに、前期・後期旧石器時代の石器が出土し、縄文時代の住居跡や土坑、平安時代の住居跡、近世の墓塚などが発見されている。この成果は山田地区的遺跡の地域性を具現化していると考えられ、この地域の地理的要因から縄文時代以降、本格的に開拓される時期は平安時代以降である可能性の強いことを示唆している。山田条里遺構が中町段丘面上に立地していることや、旧名取郡山田村唯一の神社である羽黒神社の建立が天喜4年(1056年)であるとの記念碑なども、このことに関連のあることかもしれない。中世のことについては館跡などもなく不明な点が多いが、戦国時代の末期になると伊達氏の勢力が刈田・柴田両郡を制圧して名取郡にも波及てくる。伊達政宗による仙台開府に伴って、この地域には名取川を繋うようにして東西に貫く二口街道・笛谷街道(茂庭北赤石まで同一路)などの驛街道が整備され、旅人や背負い人足、荷をつけた馬の往来などで賑わいをみせる。現在の山田中学校裏の宿ノ入を旧街道が通っており、ここには宿ノ入の地名のとおり「上の茶屋」があつて(鉤取に「下の茶屋」があつた)、旅人が休憩したり、宿泊したようである。また、山田村には6ヶ所に溜池があり、名取川から直接水を引けない地域での開拓に努力していたことがわかる。更に、現在の山田字杉土手、山田北前町には耕作地を荒す猪や鹿の侵入を防ぐための「シシ垣」と考えられる土壘が「杉土手」と称され一部現存している。仙台叢書「封内風土記」第1巻によると、安永年間頃(18世紀後葉)の山田村の戸数は24戸となっており、これら 대부분は農業に従事していたと思われる。溜池を造り、水田を拓き、シシ垣を築き野獸の害を防止しながら、狭い可耕地を開拓している姿が彷彿としてくる。『陸前国名取郡地理誌』(明治9年頃)をみると、山田村の土質は、「その色、うす黒く、土質悪い。……桑・茶づくりに適している。水の便悪く、日照りに苦しめられる。」とあり、更に、特産物としては、農作物以外に、薪・木炭や淡水魚など

があげられている。このことから、農作業も決して容易なものではなく、山林や名取川にも生活の糧を求めていたことがわかる。

以上、現段階での調査成果を基に、山田地区の歴史的地域性を考慮して記述した。



| 番号 | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 |
|----|---------|------|--------|----------------|----|--------|------|-----|-------------|
| 1 | 北前通跡 | 段丘 | 築 | 古 | 17 | 宇摩守境穴群 | 丘 | 埋 | 六古墳 |
| 2 | 山田上ノ台通跡 | * | * | * | 18 | 鬼塚古墳 | 丘 | 古 | 墳 古墳 |
| 3 | 青葉山通跡 | 丘 | 築 | * | 19 | 龜山通跡 | 自然堤防 | 官 | 衛 古墳~奈良 |
| 4 | 上野山通跡 | 段丘 | 包 合 | 築 | 20 | 下ノ内塗跡 | * | 集落 | 築文、弥生、古墳~平安 |
| 5 | 三神塚通跡 | * | 集落 | 築文 | 21 | 元気目通跡 | * | * | 弥生、平安 |
| 6 | 山口通跡 | 自然堤防 | * | * | 22 | 押室平塗跡 | 丘 | 埋 | 佛堂、平安~中世 |
| 7 | 下ノ内浦通跡 | * | 丸塚跡・墓地 | 築文、弥生、奈良、平安 | 23 | 船渡前塗跡 | 自然堤防 | 包 合 | 弥生 |
| 8 | 六反田通跡 | * | 集落 | 築文、弥生、古墳、平安、近世 | 24 | 鹿ヶ崎城跡 | 丘 | 築 | 城 |
| 9 | 上野通跡 | 段丘 | * | 築文、弥生、平安 | 25 | 仙台城 | * | 城 | 江戸 |
| 10 | 高気通跡 | 後背湿地 | 水田 | 水田、古墳、平安~近世 | 26 | 高民塚跡 | 段丘 | 埋 | 集落 古墳 |
| 11 | 西谷通跡 | 自然堤防 | 包合地・墓地 | * | 27 | 金山塚跡 | * | 集落 | 古墳 |
| 12 | 奥町古墳 | 段丘 | 古 | 古 | 28 | 土子内塗跡 | 丘 | 埋 | 弥生、平安 |
| 13 | 金洗沢古墳 | 丘 | 埋 | 古 | 29 | 西台塚跡 | 段丘 | 瓦 | 東 古墳~奈良 |
| 14 | 砂押古墳 | 段丘 | 古 | 古 | 30 | 妙土手 | 埋丘 | シ | シ 近世 |
| 15 | 敷石古墳 | 自然堤防 | 古 | 古 | 31 | 山田条里遺跡 | 段丘 | 水田 | 古代 |
| 16 | 安宕山横穴群 | 丘 | 埋 | 六古墳 | | | | | |

第2図 周辺の遺跡

III. 調査の方法と経過

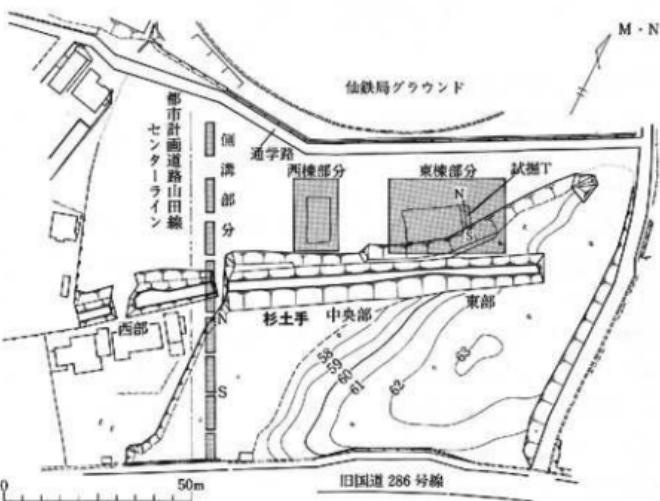
調査対象地域は、北の山田中学校への通学路と南の杉土手に挟まれた地域で、本来は溜池のあった場所であるが現在は埋め立てられて平坦な更地となっている。建設予定の市民センターの主要建物は、東棟（体育館）と西棟（管理棟）から成り立っており、調査は掘削の予想される二棟の建物部分と排水用側溝を中心として実施することになった。

調査は4月22日から開始されたが、埋め立てられた溜池部分を対象としていることから、埋土の厚さ、溜池底面下の土層を観察する目的で、初めに、重機による試掘を行なった。試掘は建物部分の四隅8ヶ所と側溝部分の1ヶ所に実施した。この結果、埋土の厚さは約3m、側溝部分と西棟部分では溜池堆積土の下はすぐに砂礫層であるが、東棟部分は溜池堆積土の下に粘土質土層のあることが確認された。このことから、更に、東棟部分南東隅に試掘トレンチ(2.5m×9m)を設定し、溜池堆積土の状況、底面の微地形、底面下の粘土質土層の検討を行なった。試掘トレンチの土層断面の観察から、溜池堆積土下層中に灰白色火山灰土が認められ、更に、粘土質土層については、昭和56年度の北前遺跡の調査で前期旧石器時代の石器の出土した所謂「浅黄色粘土質土層」と同一のものであると判断するに至った（深職員との協議及び遺跡巡査中の石器文化談会・鎌田・梶原両氏の御指導による）。このため、東棟部分を中心とした本調査に入ることになった。

本調査は、初めに、旧石器の出土を想定して、側溝に平行する都市計画道路山田線の南北センターライン杭を基準に、調査対象地域全体に6mグリッドを設定した。東棟部分の建設予定面積は26m×17mであるが、埋土が3mもあるため、北側を通る通学路の安全を考えて、北方に緩い法面をつけて、埋土、溜池堆積土上半部の排土を行なった。最終的な溜池底面での調査範囲は14.5m×9.5mである。また、西棟部分と側溝部分にも再確認のため、それぞれ、12m×20mと2m×9mのトレンチ3ヶ所を設定し、排土したが、試掘同様に全面砂礫層であった。東棟部分の精査では、灰白色火山灰土層の下層から縄文土器、土師器、須恵器の破片少量と石器が出土し、溜池底面で土坑を2基検出した。その後、粘土質土層を全て砂礫層まで掘り下げた。遺物の出土はなかったが、土層中で土坑を1基検出した。

東棟部分の調査は連日湧水との闘いで、雨の日の翌日などは調査不可能な日もたびたびあり、この部分の調査と並行して側溝部分南半（杉土手及びその南側）の調査も行なった。側溝南半部分の調査は杉土手とその南の湿地部分が対象である。杉土手の調査は土層断面観察のためのトレンチを入れて、積み土の検討を行なった。湿地部分には2m×9.5mのトレンチを4ヶ所入れたが、湿地堆積土の下は砂礫層であり、遺構、遺物は検出されなかった。

6月中旬で当初予定された調査を終了したが、市民センターの附帯施設であるキューピクル



第3図 調査区配置図

の設置場所と駐車場の確保のため、杉土手東部の調査の必要性が生じ、引き続き予定外の杉土手東部の調査に入った。長さ約25mにわたり杉土手が全面削平されることになったため、この部分の杉土手の平板測量を行ない、その後、土手の縦・横断面の観察を実施した。横断面観察のため削り取った杉土手東部南半の地山面の精査の結果、縄文時代のピット1基と須恵器窯跡1基を検出した。

7月末に杉土手東部南半の調査を終了し、土手の北半の調査方法を検討していたところ、市民センター附帯施設の設計変更が通知された。最終計画では、調査していた杉土手東部はそのまま現状保存とし、代わりに、杉土手中央部（約45m）に盛土をして駐車場とすることが決定した。このことを受けて、杉土手東部南半の修復作業を実施した後、杉土手中央部の調査に入った。この中央部は保存状態が良好な部分であるため、断面観察のための分断を極力避け、なるべく現状のままで盛土する方針をとった。調査は、山田字杉土手地区に現存している杉土手全体の平面図作成と基底幅の確認に焦点を絞り、断面観察は新たに排水路の計画されている部分1ヶ所に留めた。

溜池と杉土手を中心とした調査の終了したのは9月5日である。終了後、直ちに、工事が開始された。

以上の調査の記録は、実測図が杉土手全体平面図1/100図を除き、平面図、断面図とも1/20図、写真は、28mm、35mm、55mmレンズを使用した。

IV. 基本層位

ここでは、市民センター建設予定地である杉土手北部（溜池部分）と杉土手南部（湿地部分）の側溝部分について述べる。杉土手部分については後述する。

杉土手北部（溜池部分）

この部分には全面に厚さ約3mの埋土があり、以下の基本層位は埋土除去後の東棟部分の層位である。

[第Ⅰ層] 溜池堆積土である。上色、土性の違いによって8層に細分されるが、土性からみると、Ia～Ie層までの上位5層とIf～lh層までの下位3層とは異なっており、大きく二分することができる。上位層は暗緑色を主体としたシルト質粘土で、約20cm～60cmあり、溜池全域に分布している。この層は植物遺体が多く含まれている泥炭層であることから、この層の大部分は溜池の停滞水中で形成された堆積層である。下位層は緑黒色を主体とした粘土質シルトと黄灰色の砂から成るが、粘土質シルト中にも多量の細砂を含んでいる。また、Ig層中にはブロック状に灰白色火山灰土が含まれている。下位層の厚さは約10cm～20cmである。後述する第Ⅱ上面（溜池底面）は沢状の微地形を呈しており、下位層は沢状地にのみ堆積している。このことから、この層は、沢地に流水があった頃から自然滞水して湿地化してきた頃の堆積土と考えができる。以上の第Ⅰ層の形成過程からも、この溜池は自然の沢地を堰き止めて造られた可能性が考えられる。

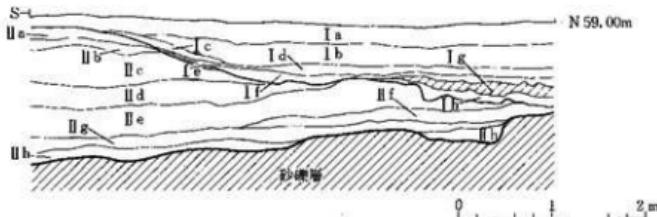
[第Ⅱ層] 本層の上面の大部分が溜池底面にあたる。上面の傾きをみると、北西と南東の両方向から傾斜し、その間が窪み、調査区のほぼ中央部が北東から南西にぬける沢状の地形となっている。本層の厚さは、最も厚い部分で約1.5mあるが、沢の部分では開析されて、基盤である砂礫層が露呈している。土色、土性の差異によって8層に細分される。土色は上半部が明黄褐色であるが下半部はグライ化して緑灰色になっている。土性は粘土質シルトと粘土が大部分を占めるが、下半部には砂粒を多く含んでいる。本層は、昭和56年度の調査で前期旧石器の出土した「浅黄色粘土質土層」に相当すると考えられるものである。その由来は、北方の軽石凝灰岩起源の供給物質を主体とする堆積土であると捉えられている（仙台市教委：1982）。

[砂礫層] 上町段丘の基盤段丘礫層である。上面の傾きは、東西方向では水平、南北方向では標高57.90m～57.40mとやや南方に傾いている。表面は凹凸が著しい。

杉土手南部（側溝部分）

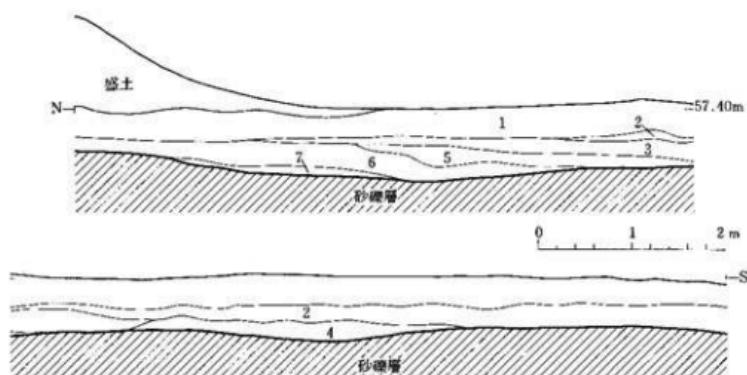
この部分も一部に盛土がなされているが、盛土以下の層位は大きく2層認められる。

[第Ⅰ層] オリーブ褐色のシルトである。厚さ20cm～30cmで、水平に全域に分布している。本層の下部には酸化鉄の集積層がみられることから、この層は旧水田の耕作土である。



東棟部分試掘トレンチ南北断面図

| 分布 | 層位 | 層厚 | 土色 | 土性 | 標 | 書 |
|------------------|--------|--------------------------|--------|---|---|---|
| 灌 漬 地 上 | a | 灰 色(7.5YR) | シルト質粘土 | オリーブ褐色(7.5YR)粘土質シルトを小ブロック状に含む。酸化鉄食む。しまり・粘性あり。 | | |
| | b | 暗 灰 色(7.5G YR) | シルト質粘土 | 酸化鉄・炭化物粒、マンガン鉄を含む。しまり・粘性あり。 | | |
| | c | 暗 綠 灰 色(10G V) | シルト質粘土 | 酸化鉄石子含む。しまり・粘性あり。 | | |
| | d | 暗 綠 灰 色(10G YR) | シルト質粘土 | 酸化鉄石子含む。しまり・粘性あり。 | | |
| | e | オリーブ褐色(7.5YR) | シルト質粘土 | 酸化鉄・炭化物粒、マンガン鉄を含む。しまり・粘性あり。 | | |
| | f | 綠 色(7.5G YR) | 粘土質シルト | 細砂を多量に含む。しまり・粘性、弾性あり。 | | |
| | g | 暗 綠 灰 色(10G YR) | 粘土質シルト | 黒褐色火山灰土をブロック状に多量に含む。細砂を含む。しまり・粘性若干。 | | |
| | h | 灰 色(2.5YR) | 砂 | 細砂の含有量多い。構成十番、十番砂、頂砂層、石礫土。 | | |
| 灌 漬 地 下 | a | 灰 色(7.5YR) | シルト質粘土 | 暗褐色(2.5YR)シルトを塊状に含む。しまり・粘性あり。 | | |
| | b | 明 灰 色(2.5YR) | シルト質粘土 | 細灰褐色(2.5YR)粘土を含む。しまり・粘性あり。 | | |
| | c | 明 黃 灰 色(2.5YR) | シルト質粘土 | 細灰褐色(2.5YR)粘土を含む。しまり・粘性あり。 | | |
| | d | 綠 灰 色(10G YR) | 粘 土 | 細砂を少量含む。しまり・粘性あり。 | | |
| | e | 綠 色(10G YR) | 粘 土 | 細砂を少量含む。しまり・粘性あり。 | | |
| | f | 明 綠 灰 色(10G YR) | シルト質粘土 | 細砂を含む。しまりはよりないが、粘性あり。 | | |
| | g | 綠 灰 色(7.5G YR) | シルト質粘土 | 細砂を含む。有機物を含んだ黑色土。(深度層か?一塙田、原原氏脚証) | | |
| | h | 灰 色(7.5YR) | 砂質シルト | 堅くしまっている。 | | |
| 砂 壠 | 砂 壠 | 綠 灰 色(5G YR) | 砂 | 表面がかなり風化している。第1層は凹凸が大きい。 | | |



側溝部分(杉木手南側)南北断面図

| 部位 | 層位 | 土色 | 土性 | 標 | 書 |
|----|----|---------------------------|-------|----------------------------------|---------|
| I | 1 | オリーブ褐色(2.5YR) | シルト | 田水田作土および土。下部に酸化鉄基層(厚さ約3~10cm)あり。 | |
| II | 2 | 暗 灰 色(2.5YR) | シルト | 砂粒を多量に含む。 | |
| | 3 | 暗 綠 灰 色(7.5G YR) | シルト | 砂粒を互角状に含む。 | |
| | 4 | 黒 色(2.5YR) | シルト | | |
| | 5 | 綠 黑 色(2.5G YR) | シルト | | |
| | 6 | 綠 黑 色(2.5G YR) | シルト | | |
| | 7 | 綠 黑 色(2.5G YR) | 砂質シルト | 砂粒を多量に含む。 | 湿地部分堆積土 |

第4図 基本層位

[第Ⅲ層] 6層に細分される。全体としてグライ化した暗緑色を呈し、砂礫を多く含むシルトである。湧水があり軟質である。堆積状況をみると、北方からの土砂の移動による自然堆積であり、砂礫の含有量の多いことも考えると、本層は北方の沢から流されてきた土砂の堆積土である。

[砂礫層] この地域には「浅黄色粘土質土層」はみられなく、湿地堆積土の下は段丘礫層である。調査区内では、標高57.20m～56.80mと南方に緩かに傾斜している。

V. 溝池部分の調査

西棟部分と側溝部分では第Ⅱ層がなく、また、造構・造物の検出がなかったため、ここでは、東棟部分の調査結果をみていく。

1. 溝池堆積土出土遺物

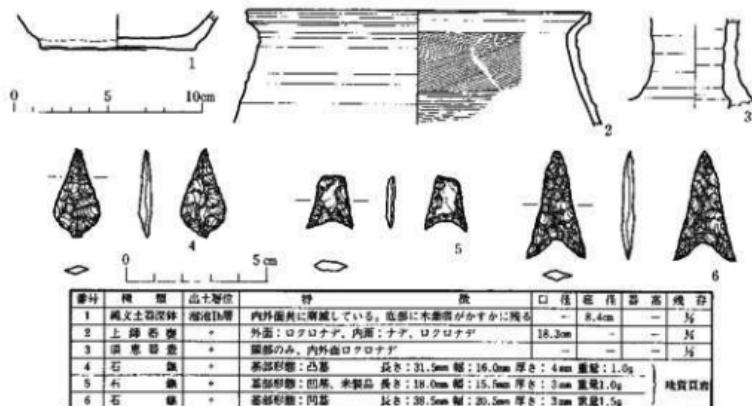
灰白色火山灰土下のⅠh層出土の遺物である。縄文土器、土師器、須恵器、石器がある。

縄文土器：磨滅した細片2点と木葉底の底部（第5図1）がある。木葉底は磨滅している。

土 師 器：3点出土しているが図示できるものは1点しかない。（第5図2）は壺の口縁部から体部上半の破片で、製作に際してロクロを使用している。図示できなかった細片は壺と壺の破片である。壺はロクロ使用のもので、内面に黒色処理が施されている。壺は外面が刷毛目、内面がナデのものである。これらの土師器の内、ロクロ使用のものは平安時代（表杉ノ入式）のものである。

須 惠 器：壺と壺の破片が2点出土している。壺は図示できないが、壺は頸部片である（第5図3）。

石 器：3点出土している。基部形態が凹基のもの2点と凸基のもの1点である。凹基無基



第5図 東棟部分調査区出土遺物

鐵の（第5図5）は基部の抉りが浅く、尖頭部の調整剝離が途中の未成品、（第5図6）は基部の抉りが深く、側縁が末広がり状の長大なものである。凸基有茎鐵（第5図4）は側縁下部に丸味をもつ木葉形のものである。茎の先端は欠損している。

2. 潜池底面（第II層上面）検出の遺構と遺物

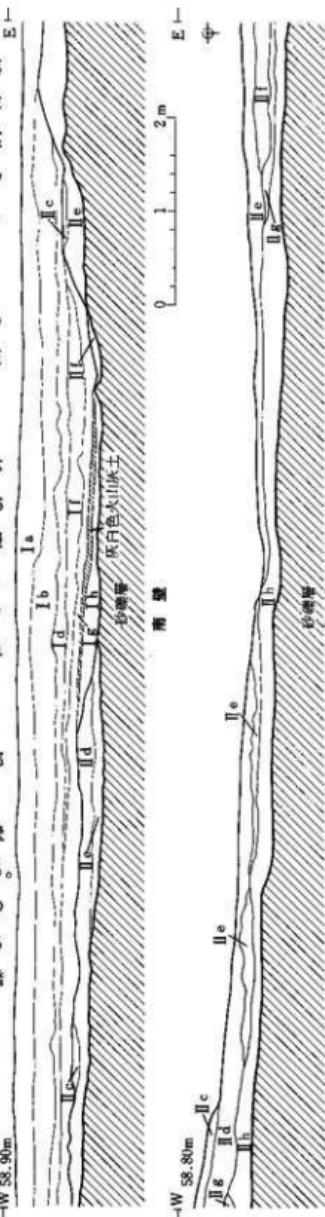
調査区南東部の沢の底面に向かう緩斜面で2基の土坑を検出した。これらの土坑の確認面の上には灰白色火山灰土が堆積していた。

第1土坑（第8図）

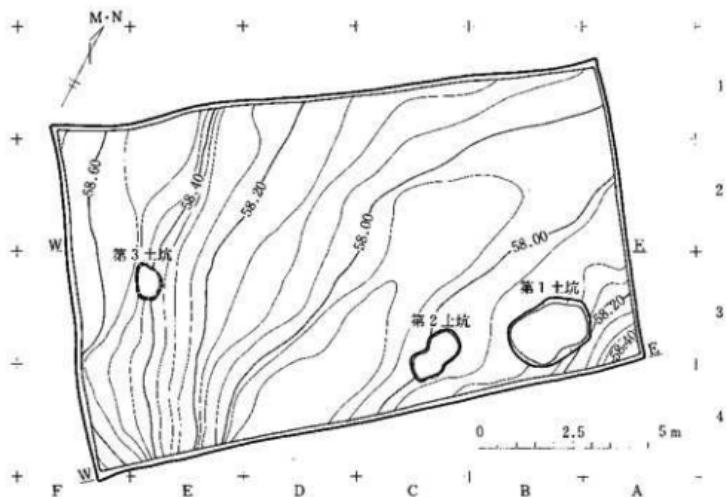
A・B-3グリッドで確認した。平面形はやや不整な隅丸長方形である。規模は長軸222cm、短軸156cm、深さ22cmである。底面はほぼ平坦で、側壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は3層に細分される。1層には礫を多く含み、2層には第II層土をブロック状に含む水平堆積層であり、人為的理土と考えられる。底面北隅で伏せた状態での漆器碗が出土した。

第2土坑（第8図）

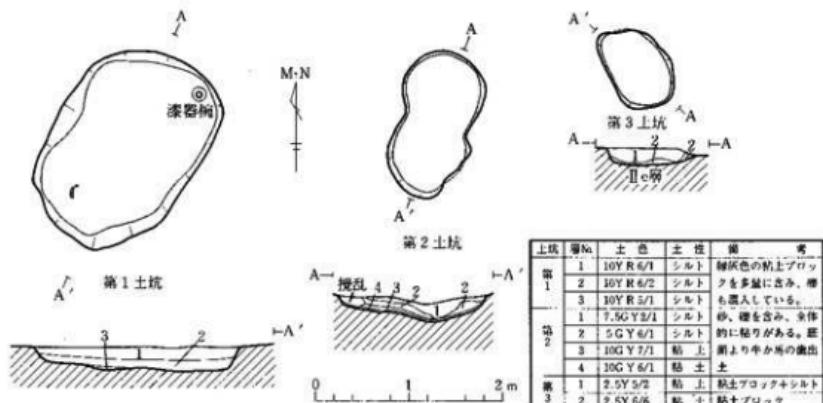
C-3・4グリッドで確認した。平面形は中央部のくびれた不整梢円形である。規模は長軸158cm、短軸70cm、深さ28cmである。底面は丸底状で、側壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は5層に細分される。礫・第II層土ブロックを各層に含み、人為的理土の可能性が強い。底面直上から、牛か馬と考えられる臼齒が出土している（東北大学文学部大学院 高橋理氏の同定）。



第6図 東標部分調査区東西断面図



第7図 東棟部分調査区潜池底面



第8図 東棟部分Ⅱ層検出遺構

3. 第Ⅱ層の調査と検出遺構

土層観察のためのベルトを残し、各グリッドの層理面の確認をしながら丁寧に剥離した。湧水と雨水による漏水の中で約1ヶ月半調査を行なったが、旧石器の出土は皆無であった（第6図）。遺物の出土はなかったが、層中で土坑を1基検出した。

第3土坑（第8図）

E-3 グリッドで確認した。確認面はⅡe層上面である。掘り込み面と堆積土の識別が困難で、Ⅱe層上面の検査の翌日に輪郭が明確になった。平面形は、西端にⅡd層上面からの擾乱をうけているが、ほぼ橢円形を呈している。規模は長軸99cm、短軸65cm、深さ20cmである。底面は平坦で、側壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に細分される。1層は明黄褐色の粘土ブロックと暗灰黄色のシルト質粘土から成り、2層は明黄褐色の粘土だけである。1、2層共に粘性が強い。粘土ブロックの混入状態からみて、人為的埋土の可能性がある。

VII. 杉土手部分の調査

1. 杉土手

(1). 調査前の状況

山田地区の杉土手は、昭和56年度調査区の北に約75m、今回の調査対象地域に約125m現存している。調査対象地域の原地形は、東方と西方から台地が迫り出し、その間に沢が流れ、湿地となっていたと考えられる。この地域の杉土手は、この東西の台地上と中央の湿地上に構築されている。土手の方向は北東から南西へ伸びているが、平板測量の結果、中央の湿地部分が若干北にずれていることがわかった。調査前、土手法面の上端・中段・下端には杉が植えられていた。古くに伐採されて、腐りかけた切り株だけを残しているものは、全て、項面にあり、直徑120cm～130cmほどのもので、約2m毎に認められる。規模は、基底幅約9m、頂面幅2～3m。高さは台地部分では1.5mと低く、湿地部分では3mと高くなっている。このことを、項面の傾きからみると、台地部分では斜面に沿って傾斜しているが、湿地部分では3mの高さを維持しながら水平となっている。

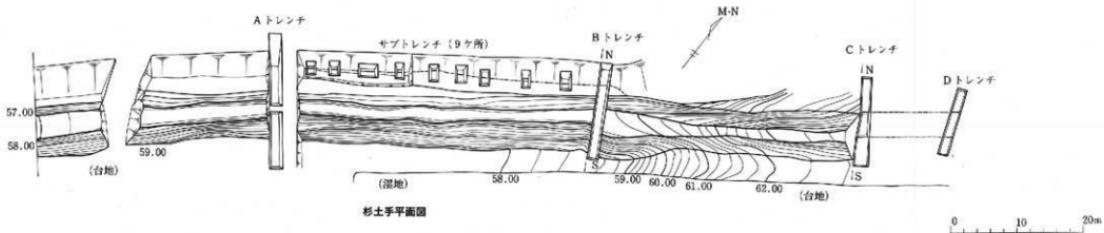
(2). 調査の結果

隨時設定したA～Dのトレーンチと中央部北法面の9ヶ所のサブトレーンチ及び東部南半部の調査区から、杉土手本体の規模、積み土の状態について観察結果を整理する。

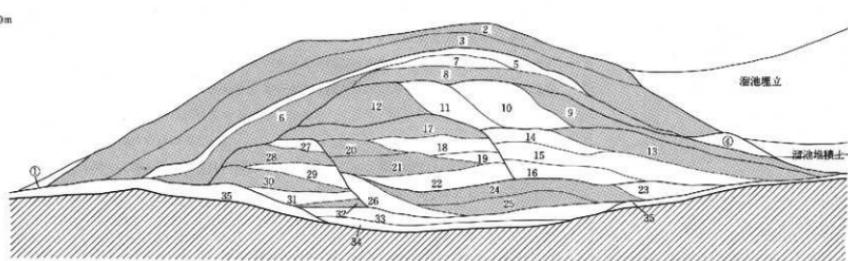
〔Aトレーンチ〕(図版9)

側溝による掘削のため杉土手西部に設定した。大雨で南北壁が崩壊し、縦断面を作成することができなかったため、略図と写真(図版9・下)を参考にする。

土手本体の規模は、基底幅10m以上、積み土の高さ3.2mである。積み土は旧表土上になされている。旧表土は、約60cmの比高差をもって北方へ傾斜している。全体的には褐灰色であるが、北半部はグライ化して緑黒色に近く、多くの砂礫が混入し、湿地に投げ入れられたような状態である。旧表土の下には基本層位第Ⅱ層が約20cm～50cm認められ、それ以下は平坦な段丘疊層となっている。積み土は、明褐色の第Ⅱ層土(シルト質粘土・粘土)と黒色のシルトの厚いブロックをほぼ交互に積み上げ、項面は第Ⅱ層土ブロックを貼り付けている。また、この頂



S →
61.00m



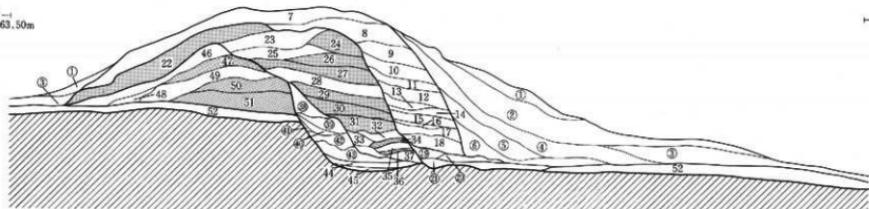
→ N

| 層番 | 層名 | 上部・土性など | 形成 | 層番 | 本色・土性など |
|----|--------------------------------------|------------------------|----|----|---------|
| Ⅰ | ① 10Y R 5/6シルト (疊積層) | 19 2.5Y 黄シルト | | | |
| Ⅱ | 2 2.5Y 黄褐色シロッカ+10Y R 5/6シルト | 20 10Y R 黄粘土ブロック | | | |
| Ⅲ | 3 2.5Y 黄粘土ブロック | 21 10Y R 黄粘土ブロック | | | |
| 層 | 4 10Y R 5/6シルト (疊積層) | 22 2.5Y 黄シルト | | | |
| Ⅳ | 5 10Y R 5/6シルト (疊積層上) | 23 2.5Y 黄シルト | | | |
| Ⅴ | 6 10Y R 5/6シルト + ブロック | 24 2.5Y 黄シルト+2.5Y 黄シルト | | | |
| Ⅵ | 7 10Y R 5/6シルト | 25 2.5Y 黄シルト+2.5Y 黄シルト | | | |
| Ⅶ | 8 10Y R 5/6シルト 貫入土ブロック | 26 2.5Y 黄シルト | | | |
| Ⅷ | 9 10Y R 黄粘土ブロック+10Y R 5/6シルト | 27 2.5Y 黄シルト | | | |
| Ⅸ | 10 10Y R 5/6シルト | 28 2.5Y 黄粘土ブロック | | | |
| Ⅹ | 11 10Y R 5/6シルト | 29 2.5Y 黄シルト | | | |
| Ⅺ | 12 10Y R 5/6シルト 貫入土ブロック+10Y R 5/6シルト | 30 2.5Y 黄粘土ブロック | | | |
| Ⅻ | 13 2.5Y 黄シルト+2.5Y 黄シルト | 31 2.5Y 黄シルト | | | |
| Ⅼ | 14 2.5Y 黄シルト | 32 2.5Y 黄シルト | | | |
| Ⅽ | 15 2.5Y 黄シルト | 33 2.5Y 黄シルト、砂礫含む | | | |
| Ⅾ | 16 2.5Y 黄シルト | 34 2.5Y 黄シルト 貫入土 | | | |
| Ⅿ | 17 10Y R 黄粘土ブロック | 35 2.5Y 黄シルト | | | |
| ⅰ | 18 2.5Y 黄シルト | | | | |

Bトレンチ南北断面図

0 1 2 m

S →
63.50m



→ N

| 層番 | 層名 | 上部・土性など | 形成 | 層番 | 本色・土性など |
|----|---------------------------------|----------------------------------|----|----|---------|
| Ⅰ | ① 10Y R 5/6シルト (疊積層) 埋没侵食しまさなし | 1 10Y R 5/6シルト+10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅱ | ② 10Y R 5/6シルト * | 2 10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅲ | ③ 10Y R 5/6シルト * | 3 10Y R 5/6シルト+ブロック 10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅳ | ④ 10Y R 5/6シルト * | 4 10Y R 5/6シルト+貫入土ブロック | | | |
| Ⅴ | ⑤ 10Y R 5/6シルト * | 5 10Y R 5/6シルト+貫入土ブロック | | | |
| Ⅵ | ⑥ 10Y R 5/6シルト * | 6 10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅶ | ⑦ 10Y R 5/6シルト 貫入侵食層 | 7 10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅷ | ⑧ 10Y R 5/6シルト * | 8 10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅸ | ⑨ 10Y R 5/6シルト * | 9 10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅹ | ⑩ 10Y R 5/6シルト * | 10 10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅺ | ⑪ 10Y R 5/6シルト * | 11 10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅻ | ⑫ 10Y R 5/6シルト * | 12 10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅼ | ⑬ 10Y R 5/6シルト * | 13 10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅽ | ⑭ 10Y R 5/6シルト * | 14 10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅾ | ⑮ 10Y R 5/6シルト * | 15 10Y R 5/6シルト | | | |
| Ⅿ | ⑯ 10Y R 5/6シルト * | 16 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅰ | ⑰ 10Y R 5/6シルト しりこみなし | 17 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅱ | ⑱ 10Y R 5/6シルト * | 18 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅲ | ⑲ 10Y R 5/6シルト * | 19 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅳ | ⑳ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 20 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅴ | ㉑ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 21 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅶ | ㉒ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 22 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅷ | ㉓ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 23 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅸ | ㉔ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 24 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅹ | ㉕ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 25 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅻ | ㉖ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 26 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅼ | ㉗ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 27 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅽ | ㉘ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 28 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅾ | ㉙ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 29 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅿ | ㉚ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 30 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅻ | ㉛ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 31 10Y R 5/6シルト | | | |
| ⅻ | ㉜ 10Y R 5/6シルト 貫入土+10Y R 5/6シルト | 32 10Y R 5/6シルト | | | |

Cトレンチ南北断面図

第9図 杉手

面の第Ⅱ層土ブロックの下層には腐植土層が認められる。積み土の構築手順は南から北へ積んで平坦にした後、上へ積み上げている。また、横縦面を見ると、西側下部の積み土は第Ⅱ層土と黒色シルトが薄く、水平に積まれており、その上の大ブロック交差の積み方とは違いが認められる。部分的観察ではあるが、積み手の違いと捉えられる。

〔Bトレーニング〕(第9図)

側溝による掘削が及ぶため、杉土手中央部に設定した。

断面を観察すると、頂面の約40cm下、法面の約70cm内側に腐植土層が認められた。腐植土層の存在から、土手の修復が行なわれたものと考えられ、この腐植土層の下をⅠ期積み土、上をⅡ期積み土として記述する。

〔Ⅰ期〕 規模は、基底幅10.8m、頂面幅3.3m、積み土の高さ2.5mである。積み土は旧表土上に積まれているが、縦断面中央部は皿状に窪んだ沢となっている。積み土はAトレーニングの本体と同様に、明褐色の第Ⅱ層土と黒褐色シルトの大ブロックをほぼ交互に積んでいる。また、この互層状の土層を一まとめにした大ブロックが6区画認められる。この6区画から積み土の構築手順をみると、南から北へ積んだ後、下から上へ積み上げており、頂部付近と法面には第Ⅱ層土の粘土ブロックを貼り付けていることがわかる。これも、Aトレーニング本体と同じである。両法面の傾きは約30°とほぼ等しい。

〔Ⅱ期〕 Ⅰ期に上積みされた全体の規模は、基底幅12.2m、頂面幅5m、高さ2.9mである。新しい積み土は、第Ⅱ層土の粘土ブロックである。頂面には約40cm、南法面には約70cmの厚さで均一に貼り付けられているが、北法面ではⅠ期崩落土の上までしか確認されない。両面法の傾きはⅠ期と同じである。

〔Cトレーニング〕(第9図)

杉土手東端に設定した。断面を観察すると、古い崩落土や層の傾き、層序関係の検討から、三ヶ所に積み手の違いが認められた。これを構築の時期差と捉え、古期より順に、Ⅰ期～Ⅲ期とする。

〔Ⅰ期〕 積み土は旧表土の上にのっている。旧表土面は北へ緩やかに傾斜している。Ⅰ期積み土の北側の傾斜面は、幅約4m、深さ約20cm～60cmほど掘り込まれて溝状になっており、この部分では旧表土が認められない。このことから、Ⅰ期積み土は、この溝状地の部分の土を積み上げている可能性が考えられる。規模は、基底幅3.5m、高さ1mであるが、溝の底面からの高さは1.7mである。法面の傾きは、北側が約75°と急で、南側が約25°と比較的緩やかである。積み土は、砂礫の少ない第Ⅱ層土（シルト質粘土）ブロックを多量に含む褐色土と暗褐色シルトを約20cm～30cmの厚さで交互に、ほぼ水平に、下から上へ積み上げている。

〔Ⅱ期〕 Ⅰ期積み土の崩落土が溝の自然堆積層の上にのっており、この崩落土層の上にⅡ期

積み土が認められる。積み土の状態はⅠ期と同様である。規模は、基底幅5.3m、頂面幅1.7m、高さ1.9mである。法面の傾きは、北が約65°、南が30°である。

〔Ⅲ期〕 Ⅱ期積み土の北側に厚く積み上げられている。Ⅲ期の積み土は第Ⅱ層土ブロックを使用しておらず、Ⅰ・Ⅱ期と異っている。黒褐色シルトだけを約20cm～40cmの厚さで水平に積み上げているが、全体的にしまりがあって堅くなっている。規模は、基底幅6.1m、頂面幅2m、高さ2.1mで、法面の傾きはⅡ期にほぼ等しい。Ⅲ期積み土の北側には厚い崩落土が認められ、現地表面での基底幅は広く観察されるが、この崩落土の量から考えると、Ⅲ期の高さは更に高かったと予想される。

〔Dトレーニング〕(第9図)

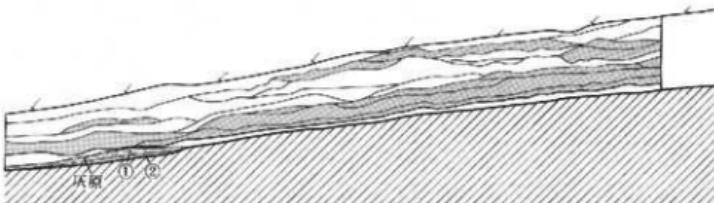
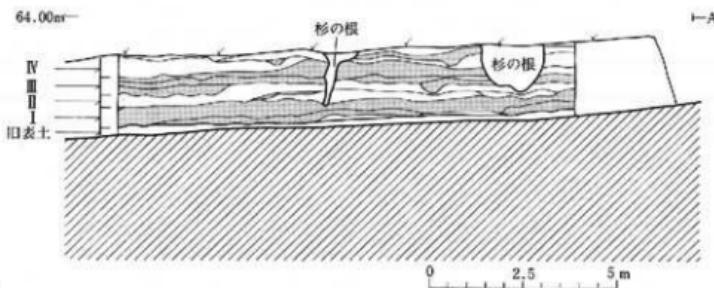
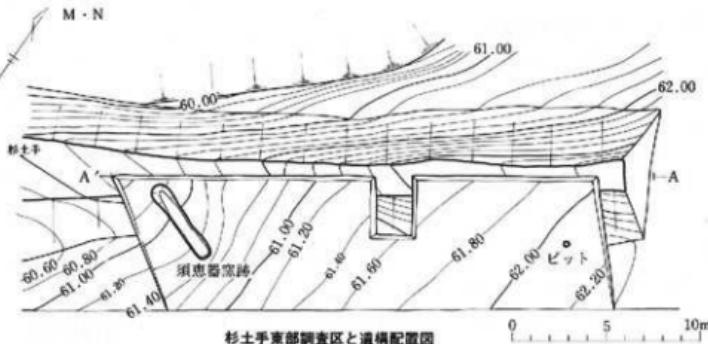
Cトレーニングの東方約15mの地点に設定した。この場所では杉土手本体の積み土は既に削平されて認められないが、CトレーニングでⅠ期積み土の北側に土取りのためと考えられる溝の存在が確認されたため、この溝の有無を目的として設定した。

現地表下約30cmの第Ⅱ層上面で、東西に伸びる幅約4mの溝を確認した。溝内堆積土は、10%YR・黒褐色シルトに若干量の第Ⅱ層土粒を含み、しまりがある。この溝は幅と位置を確認しただけで、掘り上げなかったが、方向からみてCトレーニングの溝に続くものと考えられる。

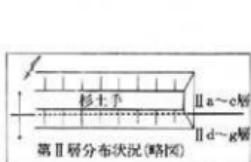
〔東部南北半調査区〕(第10図)

杉土手の横(東西)の積み手の違いを検討する目的で、長さ約25mにわたり、頂面の東西セントラーラインより南半を重機によって削平した。以下では、杉土手の東西断面の観察結果を述べ、杉土手の下で検出された構造については後述する。

この部分の旧表土面は、約2.5mの標高差をもって東から西へ傾斜している。旧表土は約20cmの平均的厚さで認められるが、西端部に木炭粒、焼土が多量に混入した地点が認められる(後述する須恵器窯の灰原)。土手本体は、この旧表土の上に構築されており、積み土は約1.4mの高さを保ちながら、旧地形に沿って西方へ傾いている。積み土は、大きく捉えると、下から順に、Ⅰ：砂礫の少ない第Ⅱ層土ブロック、Ⅱ：黒褐色シルト、Ⅲ：砂礫の多い第Ⅱ層土ブロック、Ⅳ：暗褐色シルトとなっている。この層序をCトレーニングの層と比較すると、Ⅰ・ⅡはⅠ期、ⅢはⅡ期、ⅣはⅢ期に相当するものと考えられる。さらに、Ⅰは調査区の北半、Ⅲは南半に分布しており、Ⅰは基本層位Ⅱa～c層、ⅢはⅡd～g層に対応するものである。これから考えると、Ⅰ期の積み土は土手の北方から、Ⅱ期の積み土は土取りの溝は確認されなかつたが、南方からの土を主体としている可能性がある。また、主たる目的である積み手の違いは、この約25mの長さの間には認められなかつた。25m以上の長さを1単位として構築作業をしたのであろうか。



杉土手東部東西断面図



| 像上種 | 土 色 | 土 性 等 | Cトレ時定 | 基 本 植 層 |
|-----|-------------|----------------|-------|---------|
| I | 褐色(IVY R%) | 高日量土プロック、砂混少ない | I 期 | Ⅲ-a~e主体 |
| II | 暗褐色(HGY R%) | シルト、高日量土含む | II 期 | Ⅲ-d~g主体 |
| III | 灰褐色(HGY R%) | 高日量土プロック、砂混多い | III 期 | Ⅲ-e~f主体 |
| IV | 暗褐色(HGY R%) | シルト、高日量土含む | IV 期 | |
| V | 褐色(HGY R%) | シルト、高日量土含む | | |
| VI | 褐色(HGY R%) | シルト、高日量土含む少なし | | |

| 番号 | 土色 | 土性 | 鑑 | 考 |
|----|----------------|-----|--------------------|---|
| ① | 黒褐色(10YR 4/6) | シルト | 木炭粒混多、撻土粒混少、土母礫片含む | |
| ② | 赤褐色(2.5YR 4/6) | シルト | 燃土、油焦油渣含む | |

第10図 杉土平東部調査区

2. 杉土手下の遺構と遺物

杉土手東部南半の調査区で検出された遺構と遺物について述べる。

(1) 表土・旧表土出土の遺物 (第11図)

縄文土器と陶磁器の破片が出土している。陶磁器類には急須、茶碗、猪口などがあるが、いずれも近世に遡るものではない。縄文土器は大部分が細片であり磨滅も著しいため、以下の2点しか図示できるものはない。

(第11図1)は、口縁部に羽状の刻みが施され、二条の沈線間にも羽状の沈線のみられるもので、内面は丁寧にみがかれている。所属時期は縄文時代早期(明神裏口式)である。(第11図2)は底部片で、木葉痕が認められる。

(2) 須恵器窯跡 (第12図)

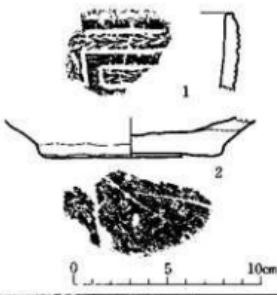
調査区西端部の第II層上面で確認された半地下式窯窓である。第II層上面が北西の沢地へと緩やかに傾斜する面に位置している。窓先端と窓口の標高差は約70cmである。窓跡下方の杉土手積み土下には、厚さ約10cmの焼土層、約15cmの木炭層から成る灰原がみられる。

[煙出し部・焼成部] 平面的には煙出し部と焼成部の境は明瞭ではない。平面形は長方形で、煙出し部先端は丸くおさまっている。床面は平坦で、約10°の角度で傾斜している。床面には煙出し部を除き、青灰色の還元面が残っている。側壁は床面との境に丸味をもちながらほぼ垂直に立ち上がる。壁面にスサ入り粘土は貼付されておらず、第II層面をそのまま壁としている。両側壁は剥落が著しいが、部分的に火熱を受けて青灰色から暗赤褐色へと変色している。

[燃焼部] 平面形は長方形で、焼成部との明瞭な境は認められない。使用された底面は2面確認された。1次底面は窓跡掘り方底面である。平坦で、焼成部の傾斜より約5°ばかり緩く水平に近い。底面上には灰、炭が残っている。2次底面は焼土、木炭粒を多量に含むスサ入り粘土を1次底面使用時の木炭、焼土などの残滓層の上に貼り付けて構築しており、しまっていて堅い。底面は平坦で、ほぼ水平であるが、やや焼成部に傾いており、焼成部との境に傾斜交換線が明瞭である。底面上には燃料残滓層が堆積している。側壁は底面から内窓気味に立ち上がる。1次底面と側壁は火熱を受けて暗赤褐色を呈している。

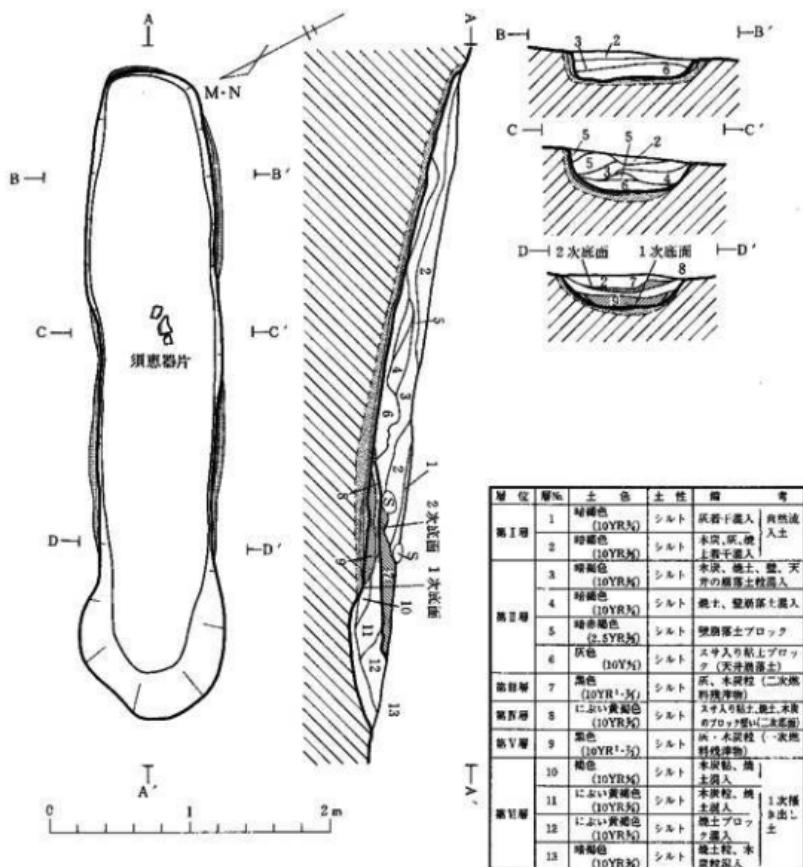
[焚口部] 1次底面に伴うもので、燃焼部より約10cm舟底状に窪んでいる。特に施設等はみられない。

[堆積土] 13層に細分された。1・2層は自然流入土、3~6層は天井部・壁の崩落土、7・9層は燃料残滓物、8層は2次貼床、10~13層は1次底面使用時の掘き出し土である。



第11図 杉土手東部出土土器

| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 |
|----|--------|----|----------|
| 1 | 縄文土器断片 | 表土 | 沈線間に矢羽根文 |
| 2 | * | * | 底部に木葉痕 |



第12図 須恵器窯跡

[中軸線の方向] S - 72° - E

[窯体の規模] 全体——長さ 4.6m 最大幅0.9m 確認面からの最大深 0.3m

煙出し部・焼成部—長さ 2.7 m 幅 0.9 m 残存高 0.2 m

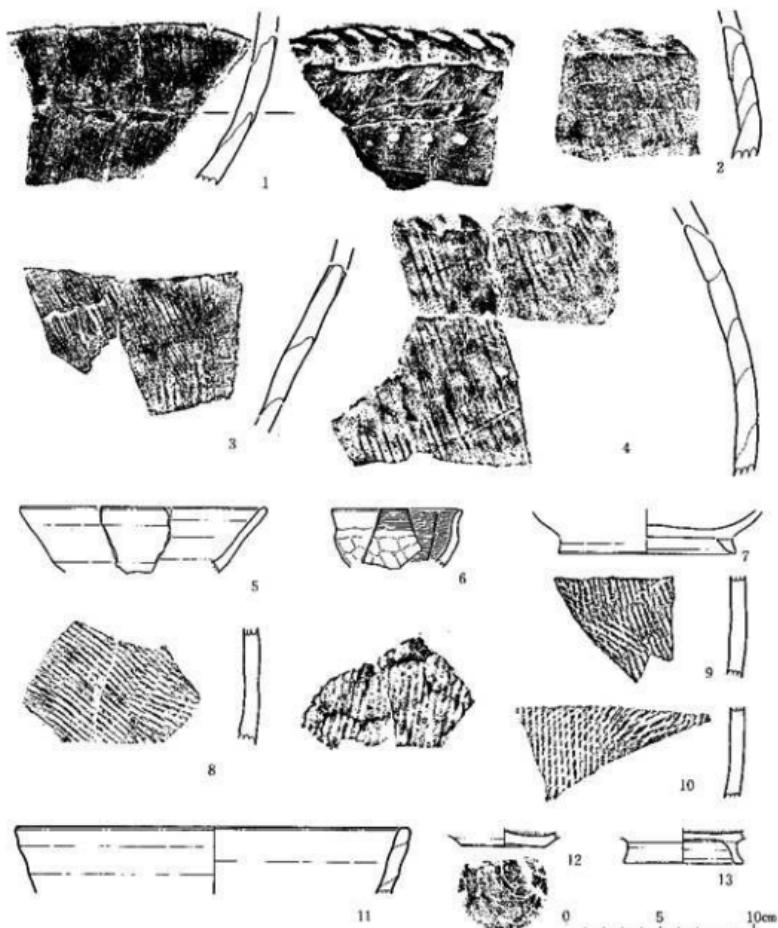
燃焼部—長さ 1.0 m 幅 0.8 m 残存高 0.25 m

焚口部—長さ 0.9 m 幅 1.0 m 残存高 0.3 m

[出土遺物] (第13図)

(窯体出土土器) (第13図1~4) は燃焼部および焼成部底面出土の須恵器窯の体部破片で

| 層位 | 厚% | 土色 | 土性 | 備考 |
|-----|----|----------------------|-----|-----------------------------|
| 第Ⅰ層 | 1 | 灰褐色 (10YR 5/4) | シルト | 灰岩下進入、自然流 |
| | 2 | 灰褐色 (10YR 5/4) | シルト | 木炭、灰、礫 上部若干進入、入土 |
| 第Ⅱ層 | 3 | 灰褐色 (10YR 4/4) | シルト | 木炭、他土、礫、灰 井の縁石上进入 |
| | 4 | 灰褐色 (10YR 4/4) | シルト | 焼土、壁根下进入 |
| 第Ⅲ層 | 5 | 灰褐色 (2.5YR 5/4) | シルト | 壁根落土プロック |
| | 6 | 灰色 (10YR 5/6) | シルト | 木炭入り粘土プロック (灰井底落土) |
| 第Ⅳ層 | 7 | 灰色 (10YR 1/4) | シルト | 灰、木炭粒(二次燃 料残存物) |
| | 8 | に赤い黄褐色 (10YR 5/6) | シルト | 木炭入り灰土、他土、木炭 ガロフ(窯井二重底面) |
| 第Ⅴ層 | 9 | 灰色 (10YR 1/5) | シルト | 木炭残存物 (一次灰) |
| | 10 | 褐色 (10YR 5/6) | シルト | 木炭粒、礫 上部进入 |
| 第Ⅵ層 | 11 | に赤い黄褐色 (10YR 5/6) | シルト | 木炭粒 上部进入 |
| | 12 | に赤い黄褐色 (10YR 5/6) | シルト | 焼土プロック 上部进入 |
| 第Ⅶ層 | 13 | 褐色 (10YR 5/6) | シルト | 木炭入り、木 炭灰进入 |



| 番号 | 種類 | 出土場所 | 物 | 寸 | 口 径 | 底 径 | 器 高 | 残 |
|----|---------|-------|-------------------------------------|-------|-------|-------|-----|-----|
| 1 | 須恵器 要 | 底 盆 | 外面：平行タタキ、内面：ナギ、横み上口斜傾形厚 | - - - | - - - | - - - | - - | - - |
| 2 | * | (1次) | (1-4は同一構造である。) | - - - | - - - | - - - | - - | - - |
| 3 | * | * | 砂程をほとんど含んでない。 | - - - | - - - | - - - | - - | - - |
| 4 | * | * | これらは、焼物として利用されていた可能性がある。 | - - - | - - - | - - - | - - | - - |
| 5 | 須恵器 細 | 焚口堆積土 | 内外側にクロナデ、ロクロ目不規則 | - - - | - - - | - - - | - - | 34 |
| 6 | 須恵器 小鉢 | * | 口縁部内外面・体部内面：横ナギ、体部外面：オサエ、手捏ね土器 | - - - | - - - | - - - | - - | 34 |
| 7 | 須恵器 素面 | * | 高内部のみ焼存、内外クロナデ、底成三角形状 | - - - | - - - | - - - | - - | - - |
| 8 | 須恵器 要 | 底 盆 | 外面：平行タタキ、内面：平行アテ目、内面にはオサ人痕も確認 | - - - | - - - | - - - | - - | - - |
| 9 | * | * | (8-10は同 他件である。) | - - - | - - - | - - - | - - | - - |
| 10 | * | * | 外面上平行タタキを重複して、横子タタキ状に見える。 | - - - | - - - | - - - | - - | - - |
| 11 | 須恵器 細小鉢 | * | 内外側にクロナデ、軽質で、砂程含まず、横み上口斜傾形厚 | 21.0 | - - | - - | - - | 34 |
| 12 | 土 師 器 | * | 外側にクロナデ、内面：ヘラミガキ、萬字紋理、底部：回転未切り無調板 | - - | 4.5cm | - - | - - | 34 |
| 13 | 土 師 器 | * | 外側：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ、黑色施塗、底部：ナギ、切り離し不明 | 5.9cm | - - | - - | - - | 34 |

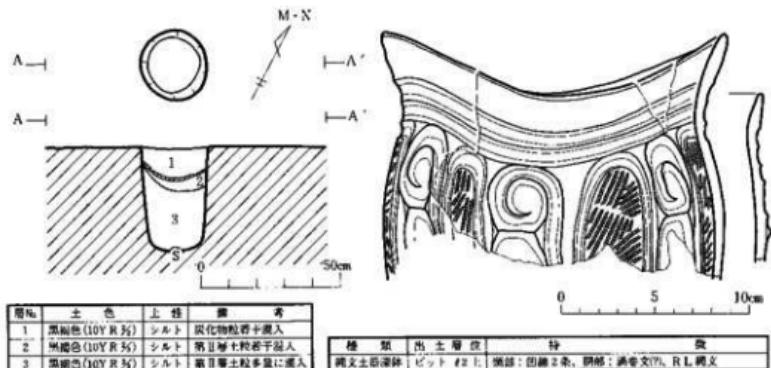
第13図 須恵器窯跡・灰原出土遺物

ある。焼台として使用された可能性もある。外面の平行タタキ目の幅が広く、内面ナデのものである。粘土紐の積み上げ痕跡が明瞭で、接ぎ目にはキザミが入れられている。（第13図5～7）は焚口部堆積土出土の須恵器である。（第13図5）は、壺の口縁部～体部の破片である。体部下半にやや丸味をもちらがら外傾して口縁部に至るもので、内外のロクロ目は不明瞭で、胎土には1mm～3mmの砂粒を多量に含む。（第13図6）は小形の鉢の破片で、口縁部から体部上半のみのものである。丸味をもって立ち上がり、若干口縁部下方で一旦窄んだ後外反して開いている。口縁部外面および内面全面には横ナデが、体部外面には指のオサエ痕のみで器面調整は施されていない。手捏ね土器である。（第13図7）は高台付壺の付高台の剥落部分である。

(灰原出土土器) （第13図8～10）は須恵器壺の体部破片である。外面に幅の狭い平行タタキ目、内面に平行アテ目が認められる。（第13図11）は須恵器と考えられるが、軟質なもので、瓶か鉢とを考えられる。粘土紐の積み上げ痕跡が明瞭であるが、内外面にロクロ調整が施され、胎土には砂粒をほとんど含んでいない。（第13図12）は土師器壺の底部片である。底部は回転糸切りで、内面には黒色処理が施されている。（第13図13）は土師器高台付壺の高台部分である。外面にはロクロ調整、内面には黒色処理が施されている。また、細片のため図示できなかったが、内外面ロクロ調整の土師器壺の破片が1点ある。

(3) ピット（第14図）

調査区東端部の第Ⅱ層上面で確認された。周辺は平坦で、他の遺構は認められない。平面形は円形である。やや丸味をもった底面から壁が垂直に立ち上がる。直径は24cm、深さは37cmである。堆積土は3層認められた。1・2層間から縄文土器が横倒しの状態で出土した。



第14図 ピットと出土土器

(縄文土器)（第14図）

口縁部から胴部上半にかけての深鉢の破片である。胴部上半にやや丸味をもち、頭部で窄ま

り、口縁部が外反している。口縁部は二波状を呈する。口縁部外面は無文帯で、頸部に二条の横位凹線が巡り胴部文様帶とを区画している。胴部上半には隆線と凹線による渦巻文と凹線によって区画された懸垂文か楕円文が施されている。懸垂文か楕円文内にはR.L. 単節斜行繩文が縱方向に施されている。口縁部無文帯および内面には丁寧なミガキが施されている。口縁部外面には炭化物の付着がみられる。この土器の時期は縄文時代中期（大木9式）である。

VII. 調査成果の検討（まとめ）

ここで、今回の調査成果を時代毎に整理・検討して、まとめとしたい。

1. 旧石器時代

東棟部分の第Ⅱ層の調査の結果、遺物の出土はみられなかった。また、第3土坑については、旧石器時代に属する可能性があることから、堆積土を全て水洗いしたが石器等の遺物は検出されなかった。この土坑の所属時期については、第Ⅱ層が「浅黄色粘土質土層」に対応するのであれば、前期旧石器時代のものと考えができるものの、先の調査地区と約150m離れており、厳密な層序の検討ができないため、現段階での結論は保留にしておきたい。

2. 縄文時代

溜池堆積土の灰白色火山灰土の下層、杉土手周辺の表土・旧表土、杉土手下のピットから縄文土器が総計60点ほど出土しているが、その大部分が細片で磨滅が著しくかつ地文のみのものであるため、時期を明確にできたのは2点だけであった。先の調査で、縄文時代早期末、前期末、中期後葉の遺構が確認されていることを考えると、今回はピット1基だけであったが、周辺にも遺構の存在が予想される。しかし、遺跡ながら、杉土手南部の西方に突き出た台地は遺跡の範囲外であったために近年造成地として大部分は削平されてしまっており、旧地形は周辺部にしか残されていない。後手ではあるが、今回の調査を踏まえて、昭和62年度から、この地域も北前遺跡の範囲内に含めることにした。

3. 古代

溜池底面で検出した第1・2土坑と杉土手下で発見した須恵器窯跡について検討したい。

(1) 第1・2土坑

第1土坑では漆器椀が、第2土坑では馬か牛の臼歛が出土している。堆積土はいずれも人為的埋土と考えられる。土器の出土がなく、厳密な所属時期は不明であるが、灰白色火山灰土の存在を緩用して、平安時代頃のものと推定しておきたい。土坑の性格は不明である。

(2) 須恵器窯跡

杉土手下の第Ⅱ層上面で1基のみ検出されたもので、西向きの緩斜面上に立地している。斜面はそのまま溜池底面の沢地へと至っている。窯跡は、全長4.6m、最大幅0.9mの小規模な

半地下式窯窓である。この窯跡の構築時期については、窯跡出土の大部分が甕の体部破片であり、甕は口縁部の破片1点のみであるため、時期の決定は困難であるが、灰原出土の土師器がロクロ使用のものであることから、大きく、平安時代のものと捉えておきたい。

今回の調査によって、荒川以西の地域から初めて窯跡が発見されたことになる。荒川以東には「西多賀窯跡群」（古窯跡研究会：1976）が確認されており、古く、古墳時代中期に遡る富沢窯跡や郡山遺跡との関連の考えられる西台窯跡などが知られている。巨視的に見れば、青葉山丘陵から茂庭丘陵にまで窯跡の分布が広がったことになる訳であるが、今後は、荒川以西の歴史的地域性の中での窯跡のあり方を検討していかなければならないと考える。荒川以西の丘陵、台地の開発の地域的特性を明確にするためにも。

4. 近世

調査対象地域には約125mの長さで杉土手が現存している。この杉土手は鹿除土手とも呼ばれ、田畠を荒す鹿や猪の侵入を防ぐ目的で築かれたものと考えられているが、藩祖伊達政宗が青葉城の南の防壁として築いたもの、四代藩主綱村の時、お狩場に鹿等を確保するために築いたものなどの俗説もある。現在でも、土手の存在していた地域には、土手に関する様々な言い伝えが残っている（政宗が芝草を積んで築いたもの、土手の裏に兵を隠すためのものなど）。

ここでは、今回の調査の成果から、調査地域内での土手の性格の違い、土手の構築方法を整理し、杉土手の構築年代やその歴史的意義について再考してみたい。

（台地と湿地の土手の時期差）

Aトレントの横（東西）断面の観察の結果、西側（台地寄り）下部に積み手の違いが認められた。Aトレントの設定場所は、台地斜面から湿地へ入り込む際にあたる。この積み手の違いは、台地と湿地の土手構築の時期差と考えられる。この積み手の違いと各トレントでの積み土の状態から、台地部分の土手構築後、湿地部分の土手を築いたものと考えることができる。

（台地と湿地の土手の性格一構築目的の違い）

杉土手の平板測量の結果、中央湿地部分が僅かに北方にずれており、また、台地部分の頂面が約1.5mの高さを維持しながら地表面に沿って（平行して）傾斜しているのに対して湿地部分では高さ約3mと高くなり頂面が水平であることが明確になった。このことから、両部分での土手の構築目的の違いが想定された。このことを検証するために、中央湿地部分のBトレントと東部台地部分のCトレントの断面観察の結果を比較してみる。双方とも修復がなされているため、最も新しいBトレントⅡ期（B-II）とCトレントⅢ期（C-III）を比較する。

| | | | | |
|--------|---|-----------------|-------|--------|
| (1) 規模 | — | (B-II) 基底幅12.2m | 頂面幅5m | 高さ2.9m |
| | — | (C-III) 基底幅6.1m | 頂面幅2m | 高さ2.1m |

- (2) 法面の傾斜角度
 - (B-II) 両面がほぼ等しく、約30°
 - (C-III) 南面が約30°、北面が約65°
- (3) 積み土の手順
 - (B-II) 南から北へ積んだ後、上へ積み上げる。Aトレンチ同様。
 - (C-III) I～III期と北側に厚く、下から上へ積み上げる。
- (4) 積み土の状況
 - (Bトレ) 第II層土と黒色シルトの厚いブロックを塊のままほぼ交互に積み上げる。頂面および法面には最後に第II層土を貼り付ける。
 - (Cトレ) 第II層土と黒色シルトの薄いブロックを水平にはほぼ交互に積み上げる。版築状を呈する。

以上の相違点を踏まえると、台地部分の杉土手は、法面の傾斜が北側（丘陵側）が急であることとその高さから杉土手本来の機能を有する「塵除土手」であり、湿地部分の杉土手は、その規模、法面の傾斜角度、表面への粘土（第II層土）の貼り付けなどから、塵除土手構築後、沢地を堰止めて溜池を造るために築かれた土手「堤」であると考えることができる。

以下では、この溜池と塵除土手について検討する。

[溜池]

溜池の堤の規模（I期）は、敷（基底幅）6間、馬踏（頂面幅）2間、法面2間、高さ1.5間である。この堤の構築時期について調査からの検討資料はないが、「名取郡北方山田村絵図（文政四年）」（市博物館所蔵）には描かれていることから、江戸時代の後期に存在していたことは確かである。この溜池は井戸様堤と現在、地元で呼ばれているが、『陸前国名取郡地理誌』には明治期の溜池6ヶ所が記載されており、その内の、土手池にあたるものと考えられる。代々、この地域の溜池の水の管理をしてきた、山田上ノ台町の加藤一夫氏によると、明治時代に水の浸透を防ぎ、堤を補強するために、上置（馬踏の上に土を盛って高さを増すこと）と腹付（法面に一定の厚みを加えること）を行なったそうである。BトレーニングII期の積み土は、この時のものと考えられそうだ。また、溜池から水を流すための樋については、栗の厚板の上に、U字溝状に削り貫いた秋保石（凝灰岩）を伏せ、溜池水面下の樋の先端は栗の厚板でおさえられた後、周りを芝草の根で固定し、さらに、秋保石の上面には水抜きの穴をあけ、當時は丸太材を入れて栓をしておくものであることを知ることができた。

江戸時代は各藩とも新田開発に力をそいだが、仙台藩に於いても、政宗以来、仙台領を江戸の米の供給地とすべく、新田開発を積極的に奨励している。仙台藩の新田開発の最盛期は、寛永年間から寛文年間の江戸時代前期頃であるが、山田地区の溜池も、この地区の新田開発と深く結びついていると考えられる。具体的に、仙台領内の各村毎の総収穫高を貢高・石高で記した幕府の公式帳簿である「郷帳」の記載をみてみると、山田村の田畠の総収穫高は、「正保

郷帳（正保2年）では32貫569文、「天保郷帳（天保4年）」では390石94升である。約200年間で70石程増加している。比較のため、名取郡北方の他の村々の増加量をみると、茂庭村（約38石）、鈎取村（約92石）、富田村（約58石）、大野田村（約111石）、平岡村（約223石）、根岸村（約288石）となっている。山田村を含む荒川以西の地域の増加量は以東に比して少ないことがわかる。このことをもってすると、山田村などでは大規模な新田開発は考えられない。しかし、山あいの谷水を利用して溜池を作りながら、少ない可耕地を切り開いていた先人の努力があったことだけは事実である。因みに、江戸時代後期（安永年間）の山田村の戸数は24戸であり、明治初期で45戸に増えるが、農業従事者が多く、特産物として、米、麦、大豆、小豆、大根、きゅうり、じゃがいも、芋、なす、キャベツ、鮎、鮑、はや、こうぞ、竹、木炭、しょうゆがあげられている（『陸前国名取郡地理誌』より）。

〔鹿除土手〕

猪（いのしし）、鹿（かのしし）と呼ばれるように、「シシ」は日本人の食肉のための野獣の総称である。しかし、「シシ」が食肉の対象として与えてきた恩恵の大きさ以外に、田畠に及ぼす被害も甚大であった。このため、全国に、「シシ」を防ぐための、シシ垣、シシ堀、シシ落しなどが構築されている。この内、シシ垣には、上墨（土手）、石墨、列状立石、垣根のものなどがある。シシ垣の長さは、宅地庭園地だけを測るものから、多くの村々を包括する約70kmに及ぶものまであるが、高さは1.5m～2.0mに集中しており、約6尺（1間）を基準としているようである。（斎藤：1934、直良：1968、千葉：1975、額田：1984、林：1982他）

現在、鹿や猪の数は少なくなり、県内に於いても、猪は阿武隈山地北端の丸森・角田周辺で時折見かける程であるが、江戸時代には多く棲息していたようである。仙台藩では、代々、冬に、家臣の戦闘訓練と農作物を荒す鹿猪の駆除を目的として「山追」と称する狩りを行なっており、仙台南部では越路、芦ノ口、鈎取、金剛沢などがお狩場としてあげられている。山追の回数と獲物の頭数が「伊達治家記録」に記されており、平均して、1回の山追いで鹿猪50頭、最も多い記録としては、寛延元年の鈎取山での鹿猪123頭を見ることができる。のことからも、当時、茂庭丘陵から青葉山丘陵一帯には多くの鹿猪がいたことがわかり、名取郡北方の村々が鹿猪の侵入を防止するための対策を講じたであろうことは想像に難くない。次頁の、「猪鹿垣一札之事」（石巻市・毛利伸氏所蔵）は、当地のシシ垣についての記録ではないが、当時のシシ垣の必要性、その構築の仕方、構築後の管理方法などを教えてくれるものである。

今回、調査した鹿除土手については、三原良吉氏の論考（1947）や講演などがあるが、上手の規模や全長、構築年代等について、あまり検討されることなく今日に至っている。

〔規模〕 Ⅰ期：高さ1.7m、基底幅3.5m、Ⅱ期：高さ1.9m、基底幅5.3m、Ⅲ期：高さ2.1m、基底幅6.1mである。高さは6尺（1間）内外であり、シシ垣の一般的な高さである。

猪鹿垣一札之事

一、当村之儀者山裾ニ付猪鹿田畠ヲ荒シ候ニ付
依之先年々猪鹿抱來リ候得共近年者

別而多分ニ出相荒シ甚難済ニ付為猪鹿垣

山裾ニ土手底成立可數段申合仕方左之通

一、土手底新築者仕方相極入札ニ而安札落ニ
致候右代銀者御借り入被下井跡ニ修復

櫛竹蓋代右借り入之利銀等ハ猪番ニ

渡シ來リ候麥米是迄通ニ差出シ候間是ニ而

御差配被下万一右麥米ニ而不足仕候ハ、

御高ニ割合出銀可致候覆手間者

出捨ニ而相続可仕候右之通申合候間宣敷

御世話可被下候後々年ニ至迄少茂遠亂

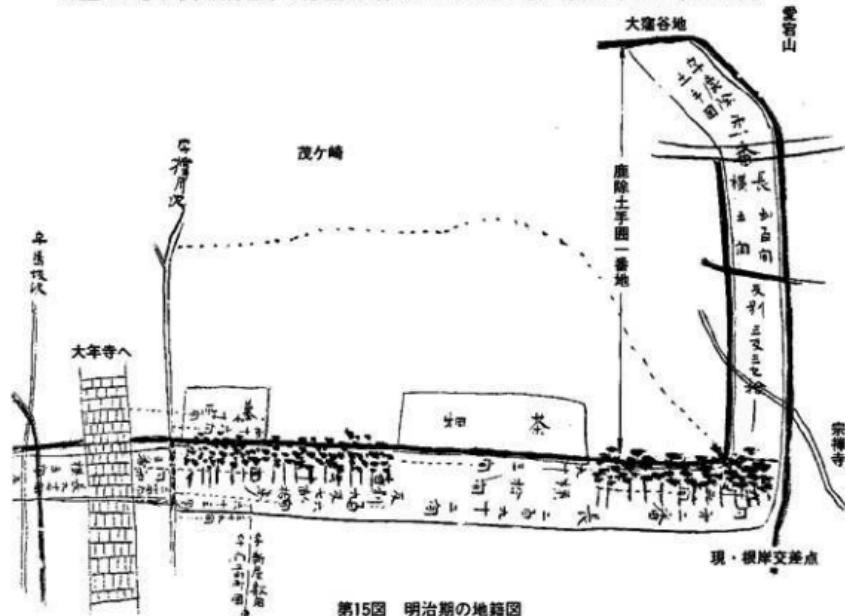
中間敷候為後日申合一札差入依而如件

文化十二年 (六十名署名・押印)

亥、月日 役人中

た部分があったと考えられる訳であり、本来は、東西6kmの土手が根岸交差点付近で直角に曲って北上し、更に360m続いていたことになる。

以上のことから、鹿除土手の総延長は約 6.4 km であることが明確になった（第16図）。



第15図 明治期の地籍図

〔構築年代〕 今回の調査から検討する資料はない。昭和56年度の調査時に、土手の法面下端部を切っている溝底面からの鉄製寛永通宝の出土をもって、江戸時代中期以前構築の可能性を指摘している（佐藤・斎野：1982）。

発掘調査以外の史料で、魔除手の年代を検討するものとして、先の山田村・鈎取村絵図（文政4年）と仙台藩山田村御山守の記録である「名取郡山田村御鹿籠御林伐木本牒（貞享年間～明治3年）」（山田字竹の内在住の山田村御山守13代当主伊藤惣十郎氏宅所蔵）がある。

絵図からは、先に述べたように塵除上手が描かれており、文政4年（1821年）には既に、土手の存在していたことが知られる。

「伐木本隣」には山村一帯の山林についての約200年間の記録があるが、この中で、「鹿除土手」の文字が初めて登場するのは文政元年（1818年）である。土手の枯れ杉を伐採したことの記録がみられる。

以上の史料からは、江戸時代の後期（文政年間）に廃除士手の存在していたことはわかるが、



第16図 杉土手全長（想定図） 大日本帝国陸地測量部明治38年測図同40年度発行
「二万分の一地形図」より作成

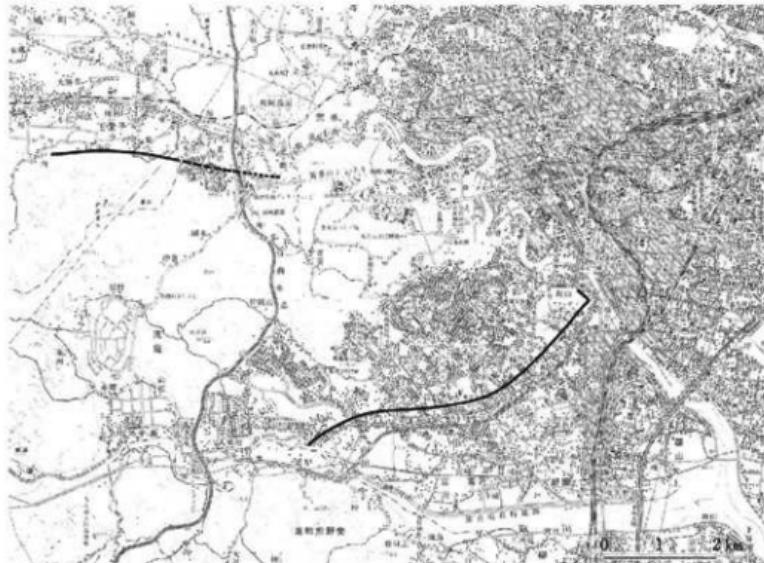
その構築年代については窺い知ることはできない。以下では、今後の検討のための印き台として、構築年代の推定のための諸例を列挙しておきたい。いずれも、江戸時代中期以前に遡る可能性を示唆するものである。

- ① 政宗以来、冬の大規模な（勢子3000名とある）山追を行なってきたが、この時に鹿除土手を築いていないと、逃げた鹿猪の被害が田畑に及びはしないか。（仙台開府時構築）
- ② 鹿除土手頂面の杉の切り株の直径が太いもので約1.2mであること。このことに関連するデータとしては、東北大学理学部付属植物園の事務所脇の杉の古木の年代は、年輪測定の結果、約1.2mの直径のものが、現在から350年前のものであることと、大竹誠一氏宅裏山の鹿除土手の杉の古木を戦時中伐採した時の大竹家の当時の記録で240年～300年前のものが大部分であったことをあげておく。（寛永の新田開発の頃構築）
- ③ 大竹誠一氏所蔵の「名取郡長町字茂ヶ崎大年寺境内近傍地図」（昭和3年以前）をみると、鹿除土手が大年寺（元禄10年開山）惣門によって切られているように描かれているこ

と。（昭和60年度の惣門の調査では土手の関係については、範囲の限定もあり、把握されていない。）（元禄10年以前構築）

- ④ 『伊達治家記録』では文政の頃から山追の獵物の数は全く記録されておらず、この頃になると鹿猪の数が減少してきていると考えられること。（文政以前構築）
- ⑤ 今回の調査区での成果として、鹿除土手は2回補修されており、3期にわたり長年使用されたと考えられること。

〔近世以後の鹿除土手〕 土手は、藩有林内に築かれていたものであるが、明治に入って、地租改正前の準備として民間に払い下げられたようである。名取郡北方官林の払い下げの請願書である「御裏林隣接山林拂下願」（大竹：1987）をみると、鹿除土手に関しては、横岸村の内大窪谷地から山田村川端までの並杉土手を、土地12両2歩、杉の木449両2歩で払い下げほしい旨のことが記載されている。これ以後、鹿除土手は民間に払い下げられ、大部分の地域が畠や宅地として削平され、今日に至っている。尚、同様のシシ垣は宮城町下愛子の番山丘陵北麓にも認められている（宮城県教委：1987）。



第17図 仙台周辺の「シシ垣」

(追記)

校正中、梅津幸次郎（1936）「築城上より見たる大年寺」『宮城教育』443号（宮城県立図書館蔵）の存在を知った。本論文は、大年寺が有時の際には防禦のための要害として機能すべく創建されたものであることを、大年寺およびその周辺の諸施設の検討から論じたものである。防禦のための諸施設の1つとして鹿除土手についての記載がある。その論考についての是非は、今後の検討課題として残るもの、鹿除土手についての記録・論考が少ない現状を考慮して、ここに収録することにした。以下、若干、長文になるが全文を掲載する。

六. 土 壁

(1) 鹿除土手

土手は北方茂ヶ崎の下を発端として、両足山を通り鹿野裏金洗沢裏より二条に分れ、一方は西多賀小学校裏より富田に走り、これを前備とし一方鈎取裏に至り更に東南に走り、同栗木瀬（名取川断崖）に至る。これは後備とする。土手の前面は名取耕土である。又終端より名取郡秋保までの河川は断岸絶壁にして容易に攀じ登る事が出来ない様になって居る。

此の土手は政宗公の築造にて、俗に政宗公の万里の長城と云う、表面は山より出て来る鹿を除けたるのと称して居る。暗に外城の備えとしたものである。

二代忠宗公の時、特に鈎取に道場を設けて、松林堀也塙を築き、門弟を五人一隊として毎日二回足習と称して、此の土手を巡警させたものである。（仙台講武雜留に掲る）

四代綱村公は特に松林氏の外に一刀流指南溝口氏をも代々此の任にあたらしめた。

以上の記載を整理すると、① 鹿除土手の機能として防禦的役割もある。② 鹿除土手は根岸から山田までの従来知られているもの（後備）の他に、西多賀から富田に至るもの（前備）がある。③ 鹿除土手は伊達政宗が築かせたものである。④ 足習と称する巡警が行なわれていた。の4点になる。この4点について、現段階での若干の検討をしておく。

①、③については、本報告書の本文中でも、古の話として載せておいたが、文献からの立証ができず、推測の域を出ない。②については、本論文入手後に踏査してみたが、発見することはできなかった。尚、富田在住の古の話によると、河川改修前の木流堀の両側には幅約3m、高さ1.5m程の土手があったと言う。④については、参考文献として「仙台講武雜留」（天保10年）を挙げていることから、その信憑性は高いものと考え、「仙台講武雜留」を探し求めたが、宮城県立図書館、仙台市立博物館、東北大学図書館、宮城教育大学図書館、仙台市民図書館ではなく、現段階での検証は不可能な状況にある。

梅津論文の発表された年は2・26事件のあった年であり、太平洋戦争前夜の時代的背景も考慮しなければならないが、鹿除土手がシシ垣としての機能の他に、防禦的性格や土砂くずれ防止などの役割も充分に考えられることであり、今後の造構・文献の発掘が多いに期待される。

引用・参考文献

- 地質調査所(1986)：「仙台地域の地質」『地域地質研究報告』
- 及川格(1985)：「山田上ノ台遺跡—昭和59年度発掘調査報告書」
『仙台市文化財調査報告書』第77集—豊島正幸：第Ⅰ章、
竹内貞子：第Ⅵ章
- 佐藤・斎野(1982)：「北前道跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』
第38集
- 渡部・主浜・柳沢(1981)：「山田上ノ台遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』
第30集
- 仙台市(1974)：『仙台市史Ⅰ』（復刻版）
- 宮城県教委(1980)：「歴史の道調査報告書一「口越え最上街道・関山越え最上街道」
『宮城県文化財調査報告書』第66集
- 仙台市立上野山小学校(1984)：「わたしたちの上野山史話（その3）」
- 藏王町(1986)：『藏王町史・考古資料篇』
- 古窯跡研究会(1976)：「陸奥国宮窯跡群Ⅱ」『研究報告』第4号
- 白鳥良一(1980)：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VI』
宮城県多賀城跡調査研究所
- 柏書房(1984)：『図録農民生活史典』
- 高倉淳(1987)：「仙台藩の新田開発—正保・天保郷帳の分析」『仙台郷土研究』
通巻235号
- 古文書を読む会(1987)：「仙台藩の正保・元禄・天保郷帳」『宮城県図書館資料』7
- 宮城県立図書館蔵(1876年頃)：『陸前国名取郡地理誌』
- 村田文夫(1982)：「おとし穴」『季刊考古学』創刊号
- 林良博(1983)：『イノシシ』『縄文文化の研究2一生業』
- 今村啓爾(1987)：『狩人の系譜』『古代の日本10—山人の生業』
- 斎藤忠(1934)：『猪垣遺蹟考』『歴史地理』第63卷4号
- 千葉徳爾(1975)：『狩獵伝承』法政大学出版局
- 直良信夫(1968)：『狩獵』法政大学出版局
- 額田巖(1984)：『垣根』法政大学出版局
- 角川書店(1979)：『角川地名大辞典4・宮城県』
- 三原良吉(1947)：『根岸橋とその両岸の歴史』『根岸橋』宮沢渡架橋工事期成会
- 大竹誠一(1987)：『御裏林隣接山林拂下願』『仙台郷土研究』通巻235号
- 宮城県教委(1987)：「宮城町西館跡・利府町郷樂・天神台遺跡」
『宮城県文化財調査報告書』第123号

図版1

調査前全景

(西より)



試掘トレンチ

作業風景

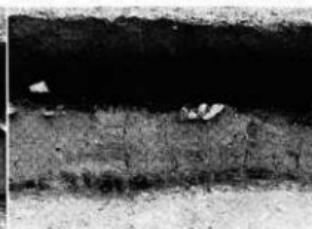
(東より)



試掘トレンチ 西壁土層断面



(南)



(北)

図版 2

東棟部分調査区

作業風景

(西より)

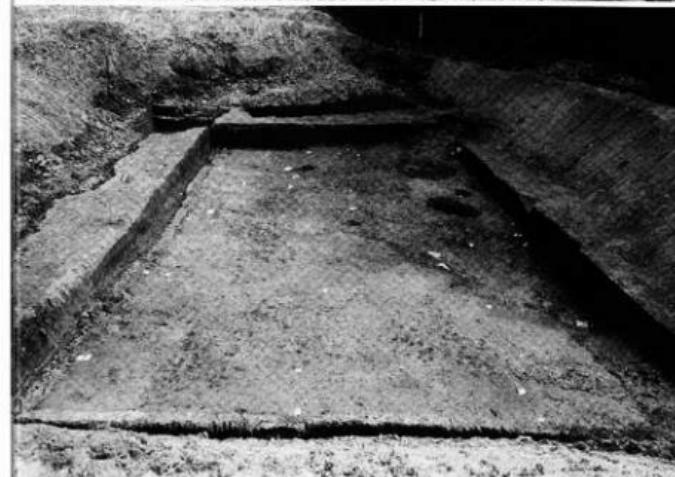


東棟部分調査区

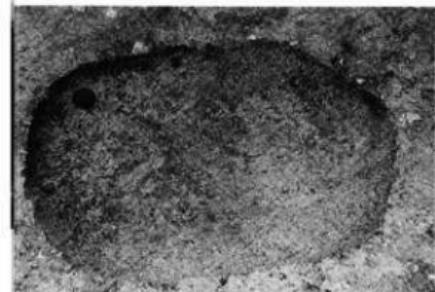
第Ⅱ層上面（潜池底面）

検出状況

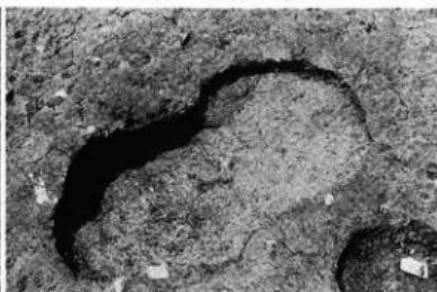
(西より)



第1土坑（北より）



第2土坑（北より）

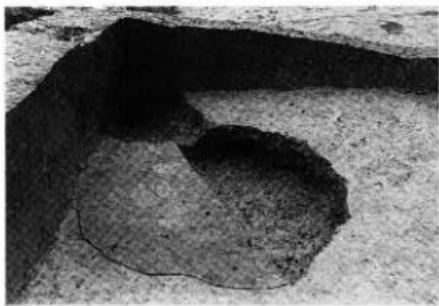


図版3

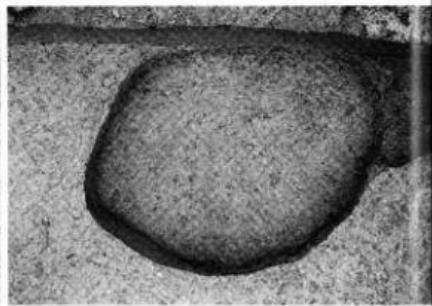
東棟部分調査区
第Ⅱ層精査風景
(西より)



第3土坑検出状況（南より）



第3土坑（東より）



東棟部分調査区
段丘疊層上面検
出（完掘）状況
(西より)



杉土手
調査前
(南西より)



杉土手
調査前
(南東より)



杉土手
調査前
(南より)





杉土手東部

(東より)

杉土手中央部

(東より)



杉土手東部

(南より)



杉土手東部

(南東より)



杉土手東部

(南西より)



図版7

杉土手中央部
(南東より)



杉土手中央部
(南西より)



杉土手中央部
(西より)

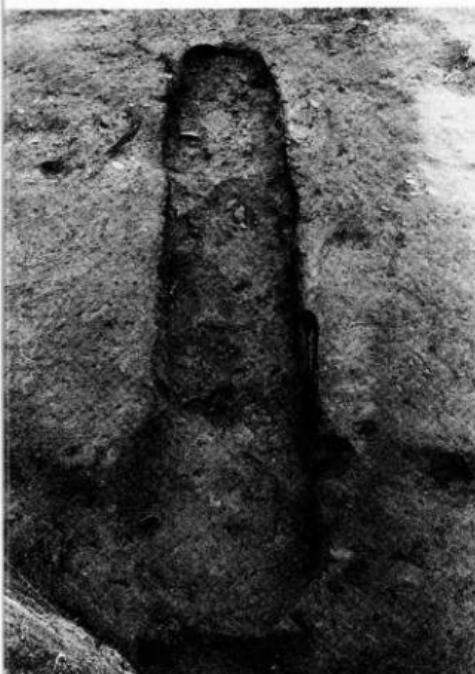




杉土手東部南半作業風景



杉土手東部東西断面



(北より)

須恵器窯跡



(東より)

窯跡燃焼部土層断面



図版9

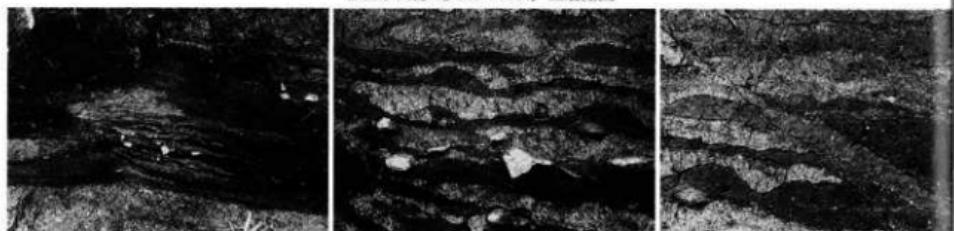
杉土手東端
〔Cトレンチ〕
土層断面



杉土手中央部〔Bトレンチ〕土層断面



杉土手西部〔Aトレンチ〕土層断面



(全体)

(細部①)

(細部②)

(南より)

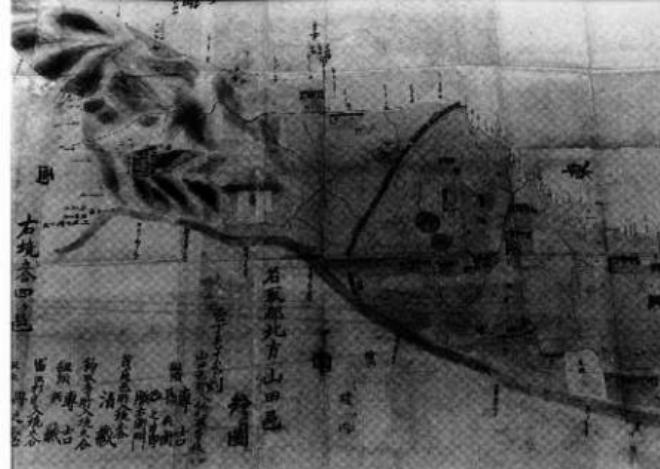
(北より)



名取郡北方

山田村絵図

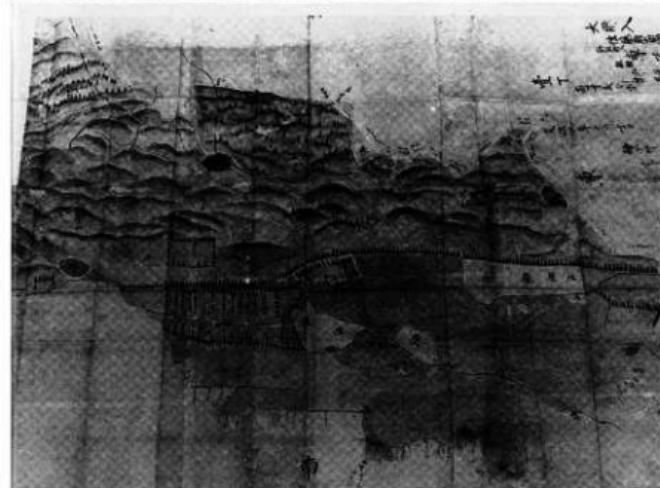
(文政四年)



名取郡北方

鈴取村絵図

(文政四年)



名取郡北方

横岸村・平岡村

入合絵図

(文政五年)



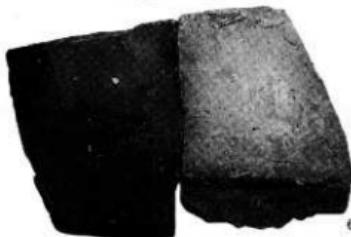


1

2



5



6



7

須恵器(積み上げ痕跡)

須恵器接合部(表)



8



9

須恵器(叩き目)

須恵器接合部(裏)

杉土手の調査参加者



1. 第14図
2. 第11図-1
3. 第5図-4
4. 第5図-5
5. 第6図-6
- 6~8. 第13図1~4
9. 第13図-8

文化財課 職員録

調査係

| | | | | | |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 課長 | 早坂春一 | 係長 | 佐藤 隆 | 主事 | 斎野 榎彦 |
| | | 主事 | 結城 慎一 | タ | 佐藤 良文 |
| 管理係 | | 木村 浩二 | タ | 長島 桂一 | |
| 係長 | 佐藤政美 | 篠原 信彦 | 教諭 | 千葉 仁 | |
| 主事 | 岩沢克輔 | 佐藤美智雄 | タ | 松本 清一 | |
| タ | 山口 宏 | 小野寺利幸 | 主事 | 及川 格 | |
| | | 太田 昭夫 | タ | 中富 洋 | |
| 主事 | 佐藤 洋 | タ | 平間 亮輔 | | |
| タ | 金森 安孝 | タ | 高橋 泰 | | |
| タ | 佐藤 甲二 | タ | 鈴木 善弘 | | |
| タ | 吉岡 泰平 | タ | 佐藤 淳 | | |
| 教諭 | 小川 淳 | タ | 松本 素明 | | |
| 主事 | 工藤 哲司 | タ | 渡部 紀 | | |
| タ | 渡部 弘美 | 派遣職員 | 高橋 勝也 | | |
| タ | 主浜 光朗 | | | | |

仙台市文化財調査報告書第105集

北前遺跡

— 第2次発掘調査報告書 —

昭和62年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市宮町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 株式会社共新精版印刷

仙台市日の出町2-4-2

TEL 236-7181

